

隠喩・換喩・提喩

——言語表現の考察——

Metaphor・Metonymy・Synecdoche

—— An Examination into Linguistic Expressions ——

村 越 行 雄

要 旨

日常的な言語コミュニケーションに広く、しかも深く浸透している比喩的表現は、言語表現の可能性を考える上で、なくてはならない重要な要素として存在している。その重要性を明らかにする意味で、本稿では、比喩の内、とくに隠喩、換喩、提喩の三つに焦点を合わせて検討することにする。具体的には、「1. はじめに」のあとの「2. 言語表現全般の中での隠喩・換喩・提喩の位置付け」では、「2-1. 字義性と比喩性」として、転義説、逸脱説などを調べ、「2-2. 言われることと含意されること」として、実際に口に出して言われる部分、それに実際には言葉によって表面に出ない部分に区別した場合、隠喩、換喩、提喩のそれぞれがどちらに属するのかを調べ、「3. 隠喩・換喩・提喩の存在意義」では、「3-1. 隠喩の存在意義」と「3-2. 換喩と提喩の存在意義」として、具体例を挙げながら、隠喩、換喩、提喩のそれぞれの特徴を調べ、言語表現全般に共通して言える的確さと効率性に基づく表現の経済性が、比喩にも当てはまることをごく簡単に示し、「4. 最後に」で終えるという検討順序である。なお、本稿における狙いは、説得性、美的装飾性などの問題としてではなく、比喩を表現の経済性の問題として捉えていくことである。ただし、表現の経済性の問題をそれ自体として本格的に検討するのではなく、それへの橋渡しの検討を行なうことで終えることにする。

Key words : 言語表現 (linguistic expression) , 言葉のあや (figure of speech) , 隠喩 (metaphor) , 換喩 (metonymy) , 提喩 (synecdoche) , 字義性 (literalness)

1. はじめに

20世紀後半に新たな展開を見た比喩に関する理論的研究は、隠喩論を中心にされてきた。そのことは、比喩研究にとって、代表的な位置を占めるべき隠喩、換喩、提喩の内、換喩と提喩の存在意義が軽視あるいは無視されてきたことを意味する。例えば、二三の例を挙げれば、換喩と提喩を隠喩の特殊事例であるとSearleが言い（1979, p. 107）、隠喩と換喩を区別した上で、提喩を換喩の特殊事例であるとLakoffとJohnson, Gibbsが言う（Lakoff and Johnson, 1980, p. 36 ; Gibbs, 1993, p. 259）という具合に、隠喩、換喩、提喩が混乱・混同されてきたが、それぞれが異なる存在意義を持つものとして、明確に区別して捉えるべきであり、そのような主張がなされてきていることも事実である。また、20世紀後半の比喩研究の特徴は、比喩表現を文学などの特殊な、限定された分野における言語表現としてではなく、広く日常的に使用されている言語表現として捉え、そこに研究の対象を置く傾向があることである。例えば、哲学、言語学などの分野で、強い影響力を持っているSearle（1979）、Grice（1975）、SperberとWilson（1981, 1985／6, 1986）、Lakoff（1987, 1993 ; Lakoff and Johnson, 1980 ; Lakoff and Turner, 1989）などの比喩研究は、程度の差、扱う範囲の差などはあるが、私達が日常的に使用している言語表現の一環としての比喩表現を対象にしている。

以上のことを踏まえて、本稿では、日常的な言語コミュニケーションにおける隠喩、換喩、提喩の働きを検討することにする。なお、言語表現全般の中での位置付け、そしてそれぞれの存在意義に大別して、検討していくこととする。

2. 言語表現全般の中での隠喩・換喩・提喩の位置付け

日常的な会話で、友人との再会を伝える意図で、「昨日、A君と10年ぶりに会った。」（字義どおりの発話）と言ったり、待遇の悪さを訴える意図で、「彼は、私をゴミのように扱うんです。」（直喩）と言ったり、非道を訴える意図で、「彼は、けだものです。」（隠喩）と言ったり、ビートルズの曲を聞いたことを伝える意図で、「一晩中、ビートルズを聴いていた。」（換喩）と言ったり、桜を見にいくことを伝える意図で、「今度の日曜日に、家族全員でお花見に行くつもりです。」（提喩）と言ったり、憎しみを表す意図で、「殺したい。」（誇張法）と言ったり、愛情を表す意図で、「大嫌い。」（反語）と言ったり、満員電車の中で足を踏まれた時、足をどけるように伝える意図で、「私の足を踏んでますよ。」（間接的言語行為・含意）と言ったり、私達は様々な言い方をする。つまり、日常的な言語表現の中には、単に字義どおりの発話だけでなく、言葉のあや（今述べたのは、その一部にすぎない）、間接的言語行為・含意なども含まれている。

しかも、言葉のあや、間接的言語行為・含意なしでは、日常的な言語コミュニケーションそのものの成立が難しくなる程、広く、深く日常生活に浸透している表現方法であると言える。では、日常的な言語表現全般の中で、とくに隠喩、換喩、提喩に焦点を合わせるとして、どのように位置付けられるであろうか。

2-1. 字義性と比喩性

比喩を考える時、まず最初に問題になるのが、字義どおりの意味と比喩的意味の関係である。言い換えれば、本義と転義の関係、標準と逸脱の関係が問題になる。例えば、美しい女性であることを伝える意図で、「彼女は、バラだ。」(隠喩)とすることがある。字義どおりに解釈すれば、人間である「彼女」が、植物である「バラ」になってしまうが、人間が植物でないことは明らかで、字義どおりの発話ではないことになる。そこで、「バラ」という語が本来の意味(本義)から転じて、別の意味(転義)に用いられて、「彼女は、美しい女性だ。」を意味すると解釈することは、可能であると思われるかもしれない。しかし、転義を語句の本来の意味から転じて生まれる別の意味(簡単に言えば、語句の意味の転換)と捉えて、「バラ」という語が本来の意味である「バラ」に取って代って、別の意味である「美しい女性」として用いられるとするならば、結局本来の意味が別の意味に入れ替わって、もとの意味が完全に消滅することになってしまう。果たして、転義説によって全て処理できるであろうか。伝統的な修辞論では、転義として、上記の隠喩、換喩、提喩、誇張法、反語、そしてその他のものが含まれる。それら全てを転義説で処理するのは、難しいであろう。もしそうであれば、「転義」という語自体の使用に無理があることになる。もともと「転義」は、tropeの訳語であるが、佐藤信夫(1982)が指摘するように、明治期以降、「転義」という訳語が一般化しているが、「比喩」あるいは「喩」と訳されてもあまりさしつかえがないのであるならば、「比喩」という語を使用しても構わないであろう。また、tropeという概念自体を完全に捨て去るべきであるとSperberとWilson(1978, p. 243)が提案している(tropeによる分類では、密接に関係のあるものが含まれず、密接に関係のないものが含まれてしまうので)が、もしその提案が妥当ならば、「転義」のもとにあるtropeという語の使用自体にも問題があることになるであろう。今述べたことはともかくとして、問題は、語句の本来の意味が別の意味に入れ替わって、本来の意味が完全に消滅するという点にあり、語句の意味の段階だけで処理するという点にある。

「彼女は、美しい女性だ。」と直接言わずに、あえて「彼女は、バラだ。」という訳で、それにはそれなりの意味があり、「美しい女性」を「バラ」にたとえる意味(さらに、バラ以外の花、それ以外のものにたとえる時の意味の相違)が明らかにされなければならない。それは、語句の本来の意味を保持しつつ、別の意味に用いられることであり、あくまでも両者の関係の中にある。転義説に対する解決策の一つとして、Grice(1975)とSearle(1979)による語句あるいは文の

意味と話し手あるいは発話の意味（話し手の意味と発話の意味は、微妙に異なるものであるが、同等に扱われることがよくあるので、ここでは区別しないことにする）の区別がある。話し手がある語句（正確には、文の中にある語句）を使用して、発話（文を実際に使用すること、口から文を発すること）する時、字義どおりの発話であれば、発話される文自体の言語的意味と話し手が意図する発話の意味が一致し、比喩的発話であれば、一致せず、ずれが生じることになる。そのような区別の仕方を受け入れるのであれば、語句あるいは文の意味の段階だけで処理するのではなく、話し手あるいは発話の意味の段階を加えて、二つの段階で処理できることになる。例えば、「彼女は、バラだ。」と言う時、「バラ」という語は、本来の意味が変化したり、入れ替わって、「美しい女性」になるのではなく、本来の意味を保持しつつ、「美しい女性」を意味する意図で、話し手がその語を発する（使用する）のであって、従って話し手が伝えようと意図する意味は、「彼女は、美しい女性だ。」ということになる。そこでは、文自体の言語的意味（字義どおりの意味）と話し手が意図する発話の意味の区別が存在し、あくまでも前者を経由して後者を表すという関係が重要な位置を占めることになる。しかし、GriceとSearleの解決策が最善のものであるとは言いがたい。彼らへの批判は、次の問題に関わってくる。

字義どおりの意味と比喩的意味の関係を、上記では、本義と転義の関係として捉えたが、標準と逸脱の関係として捉えると、どうなるであろうか。転義説と同様に、逸脱説も広く受け入れられている考え方である。GriceとSearleは、現代における逸脱説の代表的な言語哲学者とみなされ、SperberとWilson、Lakoffなど、数多くの研究者の批判が向けられている。同じ例を使用すると、聞き手側から見て、「彼女は、バラだ。」という発話を字義どおりに解釈すると、人間が植物でない以上、そこに虚偽性（Grice, 1975）あるいは欠陥性（Searle, 1979）が見出され、字義どおりの発話ではないことがわかり、比喩的発話として解釈していくことになる。つまり、発話が字義どおりの発話なのか、比喩的発話（なお、それ以外の発話は、ここでは対象にしないことにする）なのかを判断しなければならず、それが全ての出発点になり、従って聞き手がしなければならないことは、どのような発話であれ、まず最初に発話の字義どおりの意味を調べ、もし虚偽性あるいは欠陥性がなければ、そこで終わり、もしあれば、字義どおりの意味とコンテキストを考慮しながら、比喩的意味を探り出すことになる。そのようなGriceとSearleの主張の背後には、字義どおりの発話が標準で、全ての発話解釈の第一段階として字義どおりの意味の検討があり、そこに虚偽性あるいは欠陥性があるからこそ、比喩的解釈に向かうのであって、結局比喩的発話が標準から逸脱したものとして捉えられているという考えが潜んでいると言えよう。さらに、字義どおりの発話を標準的な発話であるとする以上、日常生活の中に広く、深く浸透しているはずであり、それとは反対に、標準からの逸脱とみなされる比喩的発話は、そうではないはずであろう。ところが、現実的には、日常的な言語表現において、比喩的表現の遍在性を否定することは誰もできないであろう。以上のような批判が、GriceとSearleへの批判として妥当性が

あるかどうかは、即断しにくい問題である。というのは、GriceとSearleは、字義どおりの意味における虚偽性あるいは欠陥性を根拠にして、比喩的解釈に向かうことははっきりと述べているが、そのことから標準と逸脱の関係と遍在性の有無を直接結び付けて明確にしていなかったからである。

ともかく、GriceとSearleの逸脱説への批判に見られる一つの傾向は、発話→字義どおりの意味→虚偽性・欠陥性（次の段階への移行のきっかけ）→比喩的意味という間接的推論過程に対するものである。現実的には、字義どおりの発話だけでなく、比喩的発話であっても、ある条件が満たされれば（適当なコンテキストが与えられれば）、無意識のうちに、簡単に理解できるのであって、字義どおりの意味→虚偽性・欠陥性の段階を経ることなく、発話→比喩的意味という直接的な推論過程だけで十分であるというのが、その批判の根拠である（Gibbs, 1993 ; Glucksberg and Keysar, 1993 ; Lakoff, 1993）。しかし、少なくとも相手の発話の言語的意味（字義どおりの意味）が理解できなければ、何も始まらず、たとえ虚偽性・欠陥性の段階を削除するにしても、発話→字義どおりの意味→比喩的意味という過程が必要であると考えるのは、自然ではなかろうか。そのような意見は、Recanati (1993, pp. 265-266) にも見られる。例えば、発話の字義どおりの解釈は、満足のいく解釈に辿り着く為に、最初に入力するものにすぎず、その意味で、順番として最初に来るべきものであるが、それを検討する必要はなく、コンテキストによって可能な解釈として選ばれず、削除されてしまうものであるとしている。つまり、発話を解釈する時、まず最初に字義どおりの意味を入力し、そこから始まるが、コンテキストが与えられていれば、わざわざ検討しなくても（その字義どおりの意味に、虚偽性・欠陥性があるかどうかを調べるまでもなく、従って字義どおりの意味における虚偽性・欠陥性をきっかけにして次の段階へ移行するまでもなく）、不適切なものであることは簡単にわかり、従ってすぐに比喩的意味に辿り着くことになる。しかし、もしそのようなものならば、上記の逸脱説反対論者にしても、明確には述べていないが、当然認めるのではないであろうか。というのも、外国語の場合を考えればわかるように、相手の言う言葉の意味（字義どおりの意味）が理解できなければ、コミュニケーションそのものが成り立たないのであって、言葉（の意味）の理解は、出発点であり、大前提であるからである。ただ、同じ母語を話す者同士の場合、言葉の意味の理解は、無意識のうちに、瞬時に行なわれるので、字義どおりの意味、さらにその虚偽性・欠陥性を全く意識しないだけで（「彼は、けだものです。」とか、「一晩中、ビートルズを聴いていた。」とか言われれば、字義どおりの意味、その虚偽性・欠陥性を全く意識せずに、比喩的意味を理解するのであり、慣習的な言い回しであれば、比喩であることすら意識せずに、意味を理解してしまう）、そのことで字義どおりの意味の段階を経ずに、直接的に比喩的意味に辿り着くということにはならないのではないか。

上記の逸脱説反対論者と同様に、虚偽性・欠陥性をきっかけとして捉えることはしないが、字

義どおりの意味の存在意義を強調する意見もある。例えば、WinnerとGardner (1993, pp. 426-427, pp. 438-439) は、非字義的発話の理解には、二つの段階があるとしている。一つは、聞き手が話し手の意味を推論する段階で、解釈の段階である。しかし、話し手の意味を解釈することが、聞き手に求められている全てであるならば、文の意味をすぐに通り過ぎて、話し手の意味を捉えることになるが、それでは非字義的発話と、それと同等の字義どおりの発話の働きの相違がなくなってしまう。非字義的発話の完全な理解の為には、解釈だけでなく、メタ言語的な意識も必要になる。その段階では、単に話し手の意味を解釈するだけでなく、字義どおりの文の意味を心に留めて、両者の対照を聞き取る必要があり、その対照こそが核心となる。つまり、比喩的発話を真に理解する為には、字義どおりの意味を明白なもの（無意識のうちに、簡単に理解できるといえるように、透き通った状態にする）として、すぐに通り過ぎてしまうのではなく、あくまでも字義どおりの意味と比喩的意味の間の対照（緊張関係）として捉えることが核心であって、そこに字義どおりの発話ではなく、比喩的発話をする意義があるということになる。そして、GriceとSearleと同様に、字義どおりの意味と話し手の意味の区別の必要性を認めているが、前者を経由して後者を表すという関係の場合よりは、前者の果たす役割がさらに重要になっていると言えるかもしれない。というのは、GriceとSearleと同様に、字義どおりの発話では、文の意味と話し手の意味が一致し、非字義的発話では、両者の不一致があるとしている一方で、字義どおりの意味における虚偽性・欠陥性をきっかけとして、字義どおりの意味から比喩的意味へ移行してしまうのではなく、あくまでも両者の対照（緊張関係）を重要視しているからである（しかし、そのような判断は、適切ではないと言うかもしれない。というのは、GriceとSearleの場合も、字義どおりの意味から比喩的意味へ移行するとしても、その字義どおりの意味は保持されているのであり、従って両者の緊張関係は存在していると解釈できるからである）。そして、字義どおりの意味を、最初に入力してすぐに通り過ぎてしまう、結局削除されてしまうものとしてではなく、通過しながらも、削除されることなく、心に留め、比喩的意味との緊張関係の中で見据えるものとしている点で、Recanatiよりも、字義どおりの意味の果たす役割が重要視されている。

さらに、別の逸脱説反対論者がいる（Sperber and Wilson, 1981, 1985/6, 1986; Blakemore, 1992）。基本的には、前述のLakoffなどと同様に、字義どおりの発話を標準とし、比喩的発話を標準からの逸脱とする考え方を否定し、日常的な言語表現における比喩の遍在性を主張している。しかし、Lakoffの場合は（隠喩を直接の対象にしている）、日常的で、ごく普通の知識と、日常的で、慣習的な隠喩の体系（私達の概念体系の一部として、すでに持っているもの）から隠喩的意味は得られるのであって、隠喩的発話が努力なしに、自覚なしに、絶えず無意識のうちに使用され、理解されるとしており、その意味で、字義どおりの意味→虚偽性・欠陥性の段階を必要とせずに、直接的に発話→隠喩的意味という推論過程だけで十分となる。それと

は異なる視点から、逸脱説を批判している。字義どおりの発話だけでなく、隠喩、換喩、提喩、その他の様々な比喩的発話も、全て一般的な言語使用の範囲に属するもので、比喩的発話の場合も、言語コミュニケーションで用いられているごく一般的な能力と手順が求められているだけで、それ以外の特別なものは必要なく、従って字義どおりの発話と比喩的発話は、質的ではなく、量的な区別にすぎず、比喩的意味という概念を媒介にしなくても、字義どおりの意味、含意（implicationとimplicatureを区別しているが、本稿では一応共に「含意」という訳語を使用することにする）などの概念だけで十分であるとしている。そして、話し手の思考と発話（正確には、それぞれの命題形式）の関係から、両者が同一であれば、字義どおりの発話となり、類似しているのであれば、比喩的発話となり（話し手が相手に伝えようとする思考と、実際に口から発する発話の間の類似性で、隠喩のみならず、その他の比喩も含まれる）、そこで大事なことは、話し手が自分の思考を伝えようとする時、最適の関連性のある発話をするということ、それが状況によって字義どおりの発話であったり、比喩的発話であったりする訳で、字義どおりの真実性ではなく、最適の関連性を目指して発話するということであるとしている。従って、何かを伝えようとする時、何が最も適した、関連性のある発話であるかが重要で、それが時には字義どおりの発話であったり、時には比喩的発話であったりするだけで、その意味で、字義どおりの発話が標準ではなく、限定された事例にすぎず、比喩的発話も標準からの逸脱ではなくなる。ただし、共に比喩の遍在性を認めながらも、Lakoffの場合は、最も平凡なものから最も抽象的な科学理論まで、その多くが隠喩によって理解できると言っているように、比喩（特に、隠喩）の遍在性を極めて強く前面に出し、字義どおりの発話が後退してしまっている（むしろ、言語表現全般が隠喩的になってしまっている）のに対して、SperberとWilsonの場合は、あくまでも様々な言語表現の全般的な解明が目的で、その中での比喩の遍在性を認めているのであって、字義どおりの発話もその一部にすぎないが、その存在意義は軽視されていないと言える。

以上、比喩の説明に関して、広く受け入れられている転義説と逸脱説の問題点を大雑把に検討してきた。なお、例えば、Grice, Searle, SperberとWilson, Lakoffなどのように、すでに構築された体系的な一般理論の中で、上記のことが扱われているが、その点については、深入りせずに済ました。ここで、重要なことは、虚偽性・欠陥性の問題は別にして、何らかの形で字義どおりの意味の存在意義を認めなければならないということである。それが、Grice・Searle的にするか、Recanati的にするか、Winner・Gardner的にするか、Sperber・Wilson的にするか、あるいはその他の可能性を求めるか、いずれにするかは簡単には処理できないが、字義どおりの発話ではなく、あえて比喩的発話をする意義は、字義どおりの意味との関係の中にあるからである。

2-2. 「言われること」と「含意されること」

隠喩、換喩、提喩は、それぞれどのような位置付けがなされるのであろうか。例えば、Grice (1975, p. 53) の場合は、隠喩、反語、誇張法、緩叙法を含意とし、典型的な含意と同等に扱っている。Searle (1979, pp. 108-111) の場合は、隠喩、反語、間接的言語行為を、文の字義どおりの意味と話し手による発話の意味の関係から捉え、それら全てが話し手による発話の意味になっている。ただし、字義どおりの意味を経由して話し手の意味を表すという関係は共通であるが、字義どおりの意味に欠陥がある為、その代わりに、別の意味を話し手が伝えようと意図するのが隠喩、反語であり、字義どおりの意味自体には欠陥がなく、事実である為、それに加えて、それ以上の意味を話し手が伝えようと意図するのが間接的言語行為であり、そこに根本的な相違があるとしている。そして、換喩と提喩を隠喩の特殊事例であるとしている。SperberとWilson (1986, pp. 224-226, pp. 237-238, pp. 242-243) の場合は、比喩全てを表意（「言われること」の代わりに、表意 (explicature) を使っている）とは異なるとして、含意との関係で説明するが、字義どおりの発話と比喩全てが一般的な言語使用の範囲に入れられ、単に量的区別が存在するにすぎないとしている（Griceのように、単純な比喩＝含意ではなく、含意との関係で別の角度から分析される）。ただし、話し手の思考と発話の関係を利用するのが隠喩、換喩、提喩、誇張法などで、話し手の思考と話し手以外の人の思考の関係を利用するのが反語、緩叙法などであるとして、区別をしている。Lakoff (Lakoff and Johnson, 1980, pp. 35-37; Lakoff and Turner, 1989, pp. 103-104) の場合は、言語表現全般を隠喩という視点から全面的に見直し、隠喩の遍在性を強調し、それが前面に出ている。その中で、隠喩と換喩を区別し、あるものを他のものを通して把握する方法が隠喩（二つの概念領域が関係し、一方が他方を通して理解される）で、理解することがその主要な機能であり、ある存在物を使って他の存在物を代わりに表すことが換喩（一つの概念領域しか関係せず、単一の領域内で換喩的写像が行なわれる）で、指示することがその主要な機能で、提喩をその特殊事例として含めるとしている。以上のように、定義の相違により、それぞれが異なる分類をしている。そこで、言語表現全般の中で、どのように位置付けるかが問題となる。

言語表現全般に関して、大雑把に見ることにする。よく行なわれる区別の仕方に、「言われること」と「含意されること」がある。「言われること」とは、実際に口から出して言われることであるから、発話される言葉（例えば、文）の意味、つまり言語的意味（字義どおりの意味）ということになり、意味論的に処理できる領域に属するものとなる。それに対して、「含意されること」とは、実際には言葉によって表面に出ない部分であり、言語的意味以上のことで、何らかの推論によって得られる意味のこと、つまり含意・間接的言語行為のことになり、コンテキスト依存的である為、語用論的に処理しなければならない領域に属するものとなる。例えば、Smith doesn't seem to have a girlfriend these days.（「スミスには近頃ガールフレンドがいない

ようだ。」）と言われて、He has been paying a lot of visits to New York lately.（「最近、彼は何度もニューヨークを訪ねている。」）と返答する時、ニューヨークにスミスのガールフレンドがいることを含意していることになる（Grice, 1975, p. 51）（しかし、Dascal (1979, p. 170) によると、ニューヨークにはスミスのガールフレンドがいないことを含意していることになるが、コンテキストの解釈の相違を示すものと言えよう）。次に、「昨日は、どこにいたの。」と言われて、「僕は、銀行にいたよ。」と返答する時、正に字義どおりの意味で、銀行にいたことを伝えている。以上の二つの例は、前者が「含意されること」に属し、後者が「言われること」に属するものである。前者においては、「最近、彼は何度もニューヨークを訪ねている。」と言う時、字義どおりの意味で事実を言っているが、話し手が伝えようと意図する意味は、ニューヨークにスミスのガールフレンドがいることで、コンテキスト依存性という特徴がはっきりと出ているが、後者においては、発話された言葉の字義どおりの意味が、話し手の伝えようと意図する意味となっており、そこに両者の大きな相違がある。しかし、後者のような例でも、例えば、僕、君、彼、彼女などが具体的に誰を指しているのか、昨日、今日などが具体的にいつの日を指しているのか、bankには土手と銀行の意味があるが、どちらの意味で使っているのか、そのようなことはコンテキストによって異なってくるもので、従って指示物の付与と曖昧性の除去は、コンテキスト依存的で、語用論の領域に属することになる。では、指示物の付与と曖昧性の除去は、「含意されること」に属するものであろうか。一般的には、Grice (1975, p. 44) の言うように、「言葉の言語慣習の意味に密接に関係するもの」も「言われること」に含まれるとしており、結局「言われること」は、言語的意味と指示物の付与・曖昧性の除去によって確定されることになる。

さらに、含意でもなく、指示物の付与・曖昧性の除去でもなく、しかしコンテキスト依存的で、語用論的に処理しなければならない問題がある。その問題については、Carston (1988)、Recanati (1989)、Bach (1994) などがそれぞれ異なった主張をしているが、簡単に言えば、二つのタイプの事例がある（名称、定義などがそれぞれ異なっているので、ここでは深入りしないことにする）。第一のタイプの例としては、He has bought John's book.（「彼は、ジョンの本を買った。」）（Recanatiが飽和と呼ぶ例）、Steel isn't strong enough.（「鉄は、十分強くない。」）（Bachが完全と呼ぶ例）などがあり、「ジョンの本」とは、ジョンの書いた本なのか、ジョンが探している本なのか、はっきりしないし、「十分強くない」とは、何に対してなのか、はっきりしないので、コンテキストによってはっきりさせなければならず、従ってそれらの発話が完全な命題を表現する為には、文の意味に生まれた隙間をコンテキストによって埋める必要があり（飽和）、あるいは意味的に不完全な文にコンテキストによって何らかの追加が必要になる（完全）。第二のタイプの例としては、I have had breakfast.（「私は、朝食を食べた。」）（Recanatiが強化と呼ぶ例）、You are not going to die.（「あなたは、死ぬこと

はない。）」（Bachが拡大と呼ぶ例）などがあり、「朝食を食べた」と言っても、一週間前に食べただけで、それ以降一度も朝食を食べたことがなくても、その命題は真になってしまうので、もし今日のことならば、コンテキストによって「私は、今日朝食を食べた」が得られ、「死ぬことはない」と言っても、永遠に死なないことではないので、もし母親が指を切った子供に言ったのであれば、コンテキストによって「あなたは、この傷で死ぬことはない」が得られ、従って発話によって話し手が伝えようと意図する意味と一致させる為に、完全な命題を入れて、より豊かな命題を取り出す必要があり（強化）、あるいは文に適当な語句を挿入することで、字義どおりに表現される命題を肉付けし、拡大する必要がある（拡大）。つまり、第一のタイプでは、意味的にはっきりしない部分がある為、発話は完全な命題を表現していないことになるのに対して、第二のタイプでは、意味的にははっきりしているので、発話は完全な命題を表現しているが、それだけでは話し手の伝達しようと意図する意味とは一致しないことであり、ただ両者とも、発話されたコンテキストははっきりしているので、コンテキストによって簡単に拡充できるのである。ここでは、一応両タイプを含めて、拡充(enrichment)と呼ぶことにする。なお、Bachによれば、例えば、Everybody is coming.（「全員がやってくる。」）からコンテキストによって Everybody in my class is coming to the party.（「私のクラスの（拡大）全員が、パーティーに（完全）やってくる。」）が得られるように、単一の発話で両タイプが同時に起きることもある。

語用論的に処理されるべき指示物の付与・曖昧性の除去、拡充、含意をどのように位置付けるかについては、指示物の付与・曖昧性の除去を「言われること」に、拡充と含意を「含意されること」に含めるGrice（Grice批判の中には、Griceが指示物の付与・曖昧性の除去も「含意されること」に含めていると解釈する者もいるが）、指示物の付与・曖昧性の除去と拡充を「言われること」に、含意を「含意されること」に含めるCarstonとBach（Carstonは、SperberとWilsonと同様に、「言われること」の代わりに、表意を使っているが）、指示物の付与・曖昧性の除去を「言われること」に、拡充を中間的領域としての陰意(implicature)に、含意を「含意されること」に含めるBachという具合に、区分けの相違が見られる。ここでは、どちらの方がより妥当性があるかの判断はしないことにする。ただ言えることは、「言われること」の構成要素が言語的意味と指示物の付与・曖昧性の除去であり、「含意されること」の方が含意であるとする点では、一致しているということである。問題は、拡充の位置付けである。上記の例を比較検討すれば明らかなように、指示物の付与・曖昧性の除去が言語的意味に密接に関係し、拡充（コンテキストによる言語的意味の拡充のこと）が言語的意味の延長線上に位置すると言えるが、含意については、そのような言い方はできない（例えば、「最近、彼は何度もニューヨークを訪ねている。」の言語的意味の延長線上をいくら探しても、「ニューヨークにはスミスのガールフレンドがいる。」を見つけ出すことはできないし、勿論前者と密接に関係してもいない）。そこ

で、まず拡充が「含意されること」に属さないことは、明らかであろう。次に、指示物の付与・曖昧性の除去と拡充は、言語的意味に密接に関係するか、それを拡充して、その延長線上に位置するかの相違があるということで、前者を「言われること」に入れ、後者には新たに中間的な領域を設けることもできるであろうし、言語的意味との関わりから両者とも「言われること」に入れることもできるであろう。なお、ここでは、言語的意味と何らかの関わりを持っているという理由で、一応両者とも「言われること」に含めることとする。重要なことは、指示物の付与・曖昧性の除去、拡充、含意が、コンテキスト依存的で、語用論的に処理されるべき三要素であり、互いに区別されるべきものであるということである。

以上のように考えると、言語表現全般は、言語的意味をそのまま字義どおりに表す言語表現、指示物の付与・曖昧性の除去を伴う言語表現、拡充を伴う言語表現、含意を伴う言語表現に区別できよう。そして、それらはいつも単独で現れるということでは勿論ない。前掲の「あなたは、死ぬことはない。」を例に取れば、その発話をそのまま字義どおりに意味するのが言語的意味であり、「あなた」が指を切った子供を指し（指示物の付与）、「死ぬことはない」が永遠に死なないことではなく、指を切った傷で死ぬことがないことを表し（拡充）、さらにその発話によって、母親が子供に「心配しないで」と伝えている（含意）と解釈できる。従って、誤解を避ける為に、言語的意味、指示物の付与・曖昧性の除去、拡充、含意という四つの要素によって、言語表現が分類できると言った方がいいであろう。そのような分類の仕方は、従来のような言語的意味と含意との単純な分類よりは、現実の言語表現により即していると言えるし、また比喩の位置付けにも役立つであろう。

では、隠喩、換喩、提喩をそれぞれどこに位置付けることができるのであろうか。最初は、隠喩についてである。前述のように、Griceは、隠喩を含意としている。それは、言語的意味と指示物の付与・曖昧性の除去以外の、直接言葉に表れないもの全てを含意としているGriceにとっては、当然の結果と言える（Grice自身は、特に隠喩理論という形で、詳しい分析を行っていないが、彼の含意理論から理解できるものである。Grice的隠喩理論は、Martinich (1984)に見られる）。Searleは、隠喩を話し手の意味であるとしている。それは、字義どおりの意味とは食い違う（それとの関わりを保持するが）話し手の意味の事例として挙げられている隠喩、反語、間接的言語行為の一つとしてある。SperberとWilsonは、隠喩を含意との関係から捉えている（単純に隠喩＝含意ではなく、強い含意と弱い含意の組み合わせから捉える）。それは、表意と含意の区別に基づき、指示物の付与・曖昧性の除去、拡充を含む表意には収まらず、含意に入れるしかないからである。そのように考えると、隠喩が占めるべき場所は、「含意されること」にしかないことになろう。少なくとも、「言われること」には収まらないものとなる。果たして、どうであろうか。

まず言えることは、典型的な含意と隠喩を同質のものとして捉えることはできないということであ

る。例えば、満員電車の中で足を踏まれた時に言う *You're standing on my foot.* (「私の足を踏んでますよ。」) (Searle (1975, pp. 64–67) の使っている間接的言語行為の例) の場合、実際に足を踏まれているので、その発話の字義どおりの意味は事実であり、それによって間接的に足をどけるように伝えているのである。従って、標準的な含意は、字義どおりに意味し、それに加えて、話し手が伝えようと意図する別の意味のことである。スミスの例も、同様である。それに対して、隠喩の場合は、例えば、「彼は、けだものです。」にしても、「彼女は、バラだ。」にしても、話し手の伝えようと意図する意味が、もし字義どおりの意味であれば、人間が四足の動物あるいは植物であるということになってしまい、矛盾することになるのであって、従って字義どおりの意味ではなく、その代わりに、それとは別の意味のこととなる(例えば、不人情で、ろくでもない人であるとか、美しい女性であるとか)。しかし、隠喩には、さらに異なるタイプの例がある。例えば、首相になった時、*I have climbed to the top of the greasy pole.* (「私は、つるつる滑りやすい柱のてっぺんまで登った。」) (Searle, 1979, p. 103) と言えば、字義どおりの発話として受け取ることもできるが、つるつる滑りやすい柱もなければ、登ったという行為もない状況では、大変な苦勞をして首相になったことを意味していると言える。つまり、字義どおりの意味には矛盾するところはないが、コンテキストと矛盾することになる。それら二タイプの隠喩について、Levin (1993, pp. 116–119) が意味的非両立性と意味的両立性による分類を主張している。意味的一貫性の規則に違反すれば、発話の各構成要素が互いに意味的に両立できなくなり(「彼は、けだものです。」などの例)、言語行為規則あるいは会話原則に違反すれば、発話の各構成要素間で意味的に両立するが、文の言語的意味とコンテキストが両立できないことになる(「私は、つるつる滑りやすい柱のてっぺんまで登った。」などの例)とし、後者を文学的隠喩と分けて、多義的隠喩と呼んでいる。そして、Grice・Searle 的な言い方をすれば、前者が字義どおりの意味に虚偽性・欠陥性のある場合の隠喩で、後者が字義どおりの意味自体には何の虚偽性・欠陥性のない場合の隠喩となる。ともかく、隠喩には大別して二タイプがあり、共通していることは、字義どおりの意味ではなく、その代わりに、それとは別のことを意味するという点である。以上のように、標準的な含意と隠喩の間には相違点があることになるが、「含意されること」に隠喩を含めるべきであるという考え方を受け入れるのであれば、それら異なる二つのものは、質的に区別されるものとして、あるいは単に量的に区別されるものとして、いずれかの形で含められることになる。

そこで、隠喩の位置付けを隠喩の定義、種類から見ることにする。まず、隠喩をどのように定義するかによって、隠喩の位置付けが異なってくる。転義説に従えば、「バラ」という語が「バラ」(本義)に入れ替わって、「美しい女性」(転義)として用いられ、結局文の言語的意味の段階での「彼女は、バラだ。」＝「彼女は、美しい女性だ。」となり、隠喩的意味を言語的意味の段階で処理するという意味で、隠喩が「言われること」(特に、その中の言語的意味に関わる

ものとして)に属することになる。ただし、言語的意味だけでなく、指示物の付与・曖昧性の除去も関係してくる。というのは、発話の多くは、人称代名詞、指示代名詞などを含んでおり、コンテキストによる指示物の付与が当然関わってくるからである。それとは反対に、Griceの場合は、彼の会話含意理論によって、隠喩が含意とされ、「含意されること」に属することになる。それら以外にも、例えば、「言われること」と「含意されること」の間に新たに中間的な領域を設けるのも、一つの選択肢になろう。次に、どのような種類の隠喩を対象にするかによっても、隠喩の位置付けが異なってくる。Levinの用語を使えば、意味的両立性の隠喩の場合は、字義どおりの意味と隠喩的意味の間の隔たりが大きく、「言われること」に入れるよりは、「含意されること」に入れる方が適していると思われるであろう。意味的非両立性の隠喩の場合は、二つに大別できよう。死喩と純粋な隠喩 (Searle, 1979, p. 90), 貯蔵された隠喩と新鮮な隠喩 (Morgan, 1993, pp. 129-130), 慣習的な隠喩と新奇な隠喩 (Lakoff, 1993, pp. 227-228) など、研究者によって呼び方が異なり、その内容も異なるが(呼び方の相違は、それぞれの研究者の理論の相違を反映しているが、ここでは触れないことにする)、単純に、日常生活で頻繁に使用され、慣習化されている為、すぐに、しかも直接的に隠喩的意味を理解できる隠喩、そしてそれ程頻繁には使用されず、慣習化されていない為、字義どおりの意味との関係で隠喩的意味を理解する隠喩、簡単に言えば、慣習的隠喩と非慣習的隠喩に分けて考えることにする。なお、Lakoffが慣習的隠喩を対象にし、Searleが非慣習的隠喩を対象にしていることで、字義どおりの意味の経由の必要・不必要の差が出てくると言えるかもしれない。というのは、死んだ隠喩であっても、実際は日常的に頻繁に使用されており、決して死んだのではなく、生きているのであり、その意味で、慣習的に使用されている隠喩こそが主な対象になるべきであるとLakoffが思うからである。しかし、Searleが主な対象にしている純粋な隠喩には、慣習的隠喩と非慣習的隠喩が混在しているので、今述べたような単純な対比ができるとは言えない面がある。そのことは別にして、非慣習的隠喩の場合、例えば、John's bank account is a pharaoh's burial treasure. (「ジョンの銀行預金口座は、ファラオの埋蔵財宝である。」、Morganの新鮮な隠喩の例)の字義どおりの意味から隠喩的意味を導き出すには、大きな隔たりを感じ、「含意されること」に入れる方が適していると思われるであろう。しかし、慣習的隠喩の場合、例えば、You're *wasting* my time / My income *rose* last year. (「君は僕の時間を浪費している。」、「私の収入は昨年上昇した。」) (Lakoff and Johnson, 1980, p. 7, p. 16)を見れば明らかなように、「含意されること」とは全く感じず、字義どおりの意味を経由して隠喩的意味を導き出そうと意識するまでもなく、すぐにその意味を理解してしまう。それに、英和辞典を見ても、国語辞典を見ても、それぞれの語義に上記の意味がある。Searleも、最初の字義どおりの意味を経由せずに、文が新たな字義どおりの意味を獲得するのが死喩としている。従って、慣習的隠喩を「言われること」(特に、その中の言語的意味に関わるものとして)に入れるのは、

自然であると思うであろう（それでも、字義どおりの意味の存在意義を無視すべきではないであろうが）。以上のように、どのように隠喩を定義するのか、どのような種類の隠喩を対象にするのか、それらの相違により、隠喩の位置付けの解釈に幅ができることになる。

ここでは、詳しい検討はできないので、次の点を指摘するだけにする。隠喩研究の大きな流れの一つとして、Grice, Searle, SperberとWilsonなどに見られるように、最大限に解釈して、「言われること」を言語的意味の延長線上に位置するものまでに限定し、それ以外のもの全てを「含意されること」に含めるという傾向がある。そして、隠喩を「言われること」の外側に位置するものとして定義していくことになる。しかし、Lakoff (1993) が隠喩研究における革命的転換期としている1979/1980年以降、Lakoffなどの主張するような方向で研究が進められ、広がりを見せていることも事実である。それは、単純な言い方をすれば、日常的な言語表現全般が隠喩的であり、言語的意味と言われているもの自体が隠喩的であり、隠喩なしには何も語れず、何も意味することができず、しかも隠喩としても、含意としても、全く意識せずに、ごく普通の言語表現として使用し、理解しているということである。そのことは、上記のLakoffとJohnsonの例を見ても、明らかであろう。別の例であるShe saw getting married as the *solution to her problems*. (「彼女は、結婚することが問題の解決になると思った。」)

(1980, p. 27) を見て、普通それが隠喩であるとか、含意であるとか、意識する人はいないであろうし、字義どおりに意味するものと受け取るであろう。そのような二つの流れ（勿論、それら以外の流れを否定しているのではない）の中にあって、取り敢えず隠喩を字義どおりの意味との関係で捉えることに妥当性（どのような形であれ）があるという考えで、一応「含意されること」に属するものと捉えておくことにする。その理由の一つとして、SperberとWilsonの例(1986, p. 236)を利用して言えば、母親が子供にThis room is a pigsty. (「この部屋は、豚小屋だ。」)と言う時、隠喩的発話であるが、それを字義どおりに受け取って、「僕の部屋は、豚小屋なんかじゃないよ。」と返答することは可能で、もしそうであれば、隠喩的発話には字義どおりの意味との関係を完全に否定することのできない面があるということが考えられる。勿論、死喩をどのように処理するかが問題になる。その問題解決への一つの方向として、限られた数の言葉で、無限のものを表現する為には、言葉同士の組み合わせに工夫を凝らす必要があるという、私達の言語状況がまず思い浮かぶということだけを述べておくことにする。

次は、換喩と提喩についてである。隠喩の陰に隠れて、影の薄い存在になっている、とよく不満が出される。そして、換喩の陰に隠れて、さらに影の薄い存在になっているのが提喩である。例えば、Searle (1979, p.107), BachとHarnish (1979, p.68) などが換喩と提喩を隠喩の一部に入れ、LakoffとJohnson (1980, p. 36), Gibbs (1993, p. 259) などが提喩を換喩の一部に入れるという具合に、それぞれの存在意義が軽視あるいは無視されていると言えるかもしれない。断定を避けたのは、比喩全般あるいは言語表現全般の中で、どのような線引を行なうか、そ

の線引をどのように定義するか、そのような根本的な問題に関わるものであって、その一部の現象だけを取り上げて、判断することができないからである。そのような比喩理論あるいは言語理論という観点からではなく、実際の個々の現象だけに焦点を合わせて、实例に即した分析を行なえば、分類そのものが細分化されすぎることになる。理論的研究を目的とする限り、余り細分化されすぎるとは、理論として成り立たなくなるし、余り大雑把すぎるとは、様々な種類の比喩の存在意義が失われてしまうし、結局ある程度の類型化が必要となる。それが、その類型化の一部であるが、隠喩、換喩、提喩という分類である。そして、それぞれの独立した機能・効用を明らかにする必要がある。

線引の問題から始めることにする。Searle (1979, pp. 83–84, p. 107) の場合は、文の意味と話し手の意味の関係から、両者が一致すれば、字義どおりの発話となり、一致しなければ、非字義的発話になるという具合に、両者の一致・不一致による線引に基づいており、間接的言語行為、隠喩、反語が後者に入れられ、換喩と提喩が明確に区別されずに、隠喩の中に入れられるが、それら全てに共通していることは、非字義的発話という性質である。BachとHarnish (1979, pp. 60–76) の場合は、直接的・字義的発話（字義どおりの発話）、直接的・非字義的発話（比喩的発話）、間接的・字義的発話、間接的・非字義的発話（最後の二つが含意となる）という具合に、直接性・間接性と字義性・非字義性による線引に基づいており、比喩全般が直接的・非字義的発話という性質を持っている。その中で、換喩と提喩は、明確に区別されているが、隠喩の中に入れられる。LakoffとTurner (1989, pp. 103–104) の場合は、Gibbs (1993, pp. 258–259) も同様であるが、二つの概念領域が関係するのが隠喩で、単一の概念領域しか関係しないのが換喩で、関係する概念領域の数による線引に基づいており、提喩が換喩の中に入れられるのは、両者が単一の概念領域しか関係しないという共通性の為である。SperberとWilson (1986, pp. 231–243) の場合は、話し手の思考と発話の関係を利用するのが字義どおりの発話、緩い発話、隠喩、換喩、提喩、誇張法などを伴う発話で、しかも両者が同一であれば、字義どおりの発話となり、類似していれば、それ以外の発話になるという具合に、話し手の思考と発話の関係、さらにその同一性と類似性による線引に基づいており、隠喩、換喩、提喩は、両者の類似的関係という共通の性質を持っている。なお、それと明確に区別されるのが、話し手の思考と話し手以外の人の思考の関係を利用するエコー発話、反語、緩叙法などを伴う発話である。以上のように、線引の定義と位置の相違によって、分類の仕方が異なってくるが、線を引かれた範囲の内部における性質の共通性が重視されており、理論的研究の当然の結果であろうが、性質の共通性に重心を置けば置く程、その内部での分類が疎かになってしまおうと言えよう。

換喩と提喩は、互いにどのような関係にあるのであろうか。隠喩との関係は、どうであろうか。換喩と提喩が、隠喩の中に入れられるか、それら三つが同等に扱われるか、いずれの場合も、隠喩を「含意されること」に属するものとする、当然の事として、換喩と提喩も「含意されるこ

と」に含まれることになってしまう。果たして、どうであろうか。換喩を例にして言えば、例えば、「チャイコフスキーを聴く。」、「日産を買う。」などは、その人の話を聞いたり、会社を買ったりするのではなく、チャイコフスキーの曲を聴いたり、日産社製の自動車を買ったりすることを意味している。Grice・Searle的な言い方をすれば、字義どおりに解釈すれば、そこに虚偽性・欠陥性を見出すことになり、従って字義どおりの意味ではなく、その代わりに、それとは別のものを意味することになるであろう。しかし、隠喩と同じ説明で処理できるであろうか。「彼女は、バラだ。」では、人間と植物という全く異なる種類の関係で、類似性に基づいて、字義どおりの意味（「彼女は、バラだ。」）と隠喩的意味（「彼女は、美しい女性だ。」）の間の意味的關係が理解されるのであり、発話全体に関わる問題であるが、上記の例では、製造者と製品の関係で、類似した関係にあるのではなく（例えば、チャイコフスキーという作曲家とバレエ音楽の「白鳥の湖」という作品が、類似しているとは言えない）、隣接した関係にあり（例えば、日産と聞けば、自動車を思い出すように、隣り合って続いているものとして認識するであろう）、製造者（チャイコフスキー、日産）を指示することによって、製品（チャイコフスキーの曲、日産社製の自動車）を指示するというように、発話全体ではなく、発話の中の語句（指示表現）における指示機能が問題になっているのである。そのような明確な相違は、たとえ共通の性質を認めたとしても、その共通性の下での相違として否定することはできないものである。

換喩と提喩が隠喩と異なることを認めた上で、どのような位置付けが可能であろうか。Recanati (1993, pp. 260–266, pp. 293–295) によると、例えば、ウェイトレスが他のウェイトレスに言った *The ham sandwich is getting restless.*（「ハムサンドイッチがそわそわしている。」）は、Sag (1981, pp. 275–276) が指摘するように、*It's hot in here.*（「ここは暑いですね。」）と言って、*Please open the window.*（「窓を開けてください。」）を意味するような標準的な含意ではなく、ハムサンドイッチからハムサンドイッチの注文者への指示の移動として捉えられることになり、換喩的移動と呼ばれる。そして、「言われること」の構成要素となる第一の語用論的過程、それと対比して、「言われること」を前提とする第二の語用論的過程の分類に基づいて、前者に拡充と換喩的移動が入れられるとしている。そこで、換喩的移動は、ある物（ハムサンドイッチの注文者）が別の物（ハムサンドイッチ）を指示する表現によって指示されるケースのことであり、字義どおりに表される概念から別の概念への移動が提喩的移動で、二つの概念の関係を包含関係（換言すれば、ある概念が別の概念の一部となるような部分-全体の関係）であると定義している。ただし、後者については、まず換喩的移動とした上で、括弧内で提喩的移動とすることを示しているので、換喩と提喩が明確に区別されているかどうかは、はっきりしない部分が残っているが。換喩に関する同様の定義は、Lakoffにも見られる。指示に関して、ある存在物を使って他の存在物を表すことであるとか（Lakoff and Johnson, 1980, p. 36）、ある存在物を他の存在物を指示することによって指示することであるとか（Lakoff and

Turner, 1989, p.103), 同様の定義がなされており, そして提喩を部分-全体の換喩であるとしている。その点について言えば, Recanatiの場合は, 物と物の間の指示移動を換喩とし, 概念と概念の間の指示移動を提喩とするように, 両者の区別がなされているのに対して, Lakoffの場合は, 存在物と存在物の間の指示移動(Lakoff自身は, 「移動」という言葉を使っていないが)を換喩とし, 存在物と存在物の関係の仕方に基づいて, 提喩をその一部である部分-全体の換喩とすることで, 伝統的に使われてきた「提喩」という言葉の使用を止めるように, 換喩が提喩を完全に吸収してしまっている。しかし, 一方が他方を吸収して, 消滅させるという存在意義しかないのであろうか。そう言い切れない部分があるように思われる。勿論, 先に述べたように, その点だけを取り上げて, 価値判断はできないであろう。問題は, 線引そのものに関わっているのである。非字義的発話の中で, 字義どおりの意味ではなく, その代わりに, それとは別のことを意味するというで線を引き, その共通性を重視するあまり, 換喩と提喩を隠喩の中に入れてしまったSearleと同様に, 単一概念領域しか関係しないということで線を引き, その共通性を重視するあまり, 提喩を換喩の中に入れてしまったのがLakoffであって, どこで線引を行い, それをどこまで細分化して, さらに線引を行なうかという問題になる。

ともかく, Recanatiの考え方を受け入れれば, 換喩と提喩が「言われること」に属することとなり, 「言われること」には, 言語的意味以外にも, 指示物の付与・曖昧性の除去, 拡充, 換喩・提喩が含まれ, 語用論的に処理されるべき要素が増えることになる。そのことは, 言語的意味の延長線上に位置するものとして捉えることであろうか。Recanatiは, 指示移動には発話中の語句(指示表現)という局所的働きしかなく, 発話全体ではないので, 「ハムサンドイッチがそわそわしている。」という字義どおりの意味から, 「ハムサンドイッチを注文した人がそわそわしている。」という意味へと向かうのではなく, 「ハムサンドイッチ」から「ハムサンドイッチを注文した人」へと指示の移動が行なわれ, その結果「ハムサンドイッチを注文した人がそわそわしている。」が得られることになるとしている。それは, 拡充と同様の段階で処理できることを示していると言える。例えば, 「私は, 朝食を食べた。」が「私は, 今日朝食を食べた。」に拡充されるのと同様に処理されるのであって, 「彼女は, バラだ。」が隠喩的に「彼女は, 美しい女性だ。」を意味する場合とは, 明らかに異なるということになる。もしそうでなければ, 言語的意味の延長線上に位置しないことになり, 「言われること」をどこまで拡大しなければならぬかが問題になり, 拡大の仕方によっては, 隠喩もそこに含まれることになる。やはり, 隠喩を発話全体に関わるものとして, 他と区別する方が適していると言えよう。以上のように考えるとすれば, 換喩と提喩が「言われること」に属し, それに対して, 隠喩が「含意されること」に属することになり, 両者の間に根本的な相違が存在し, 比喩の中でも位置付けの相違があり, 全般的には, 「言われること」と「含意されること」の両方にまたがる問題になる。

「2. 言語表現全般の中での隠喩・換喩・提喩の位置付け」では、最初は比喩一般に、次に隠喩、換喩、提喩に焦点を合わせ、特に位置付けに関連させて、比喩の理論という観点から検討してきた。その過程で述べてきたことは、転義説であれ、逸脱説であれ、その他の説であれ、いずれの説を受け入れるにしても、字義どおりの意味の存在意義を何らかの形で認めなければならないということであり、隠喩を「含意されること」に属するものとするが、標準的な含意とは質的に区別されるものとして含まれ、換喩と提喩を「言われること」に属するものとし、しかも拡充と同様の段階で処理できるものとして含まれるということであり、結局「言われること」から「含意されること」まで、日常的な言語表現全般に広く、深く浸透しているということであった。なお、換喩と提喩の質的区別については、具体的内容に踏み込まなければならないこともあり、次に回すことにする。

3. 隠喩・換喩・提喩の存在意義

私達は、意識するかしないかは別にして、日常的に頻繁に比喩表現を使っている。そのような日常性を比喩表現が持っているということは、日常的な言語コミュニケーションに適した機能・効用を持っているからである。それは、相手を説得する為とか、美的に飾り立てる為とか、説得力あるいは芸術的装飾性を本来の目的としているのではないことを意味する。勿論、演説、文学などの領域に限らず、日常生活においても、そのような目的の為に比喩表現を使うことはありえるし、事実使っている。しかし、今私達が注目すべき目的は、言語コミュニケーション全般に共通する目的、つまり表現の経済性である。経済性と言っても、ただ言葉の数を減少させればいいというものではない。言葉の数を減らしすぎて、省略が多くなりすぎては、言語コミュニケーションそのものに支障を来すことになってしまうからである。表現の経済性とは、自分が伝達しようと思図することを的確に、しかも効率よく表現することであり、その限りにおいて、省略による言葉数の減少が可能になるということである。つまり、発話のコンテキストが、言葉によって表現されない部分を補える限りでは、省略が可能になるが、もし補いきれない場合は、省略しすぎて、言語コミュニケーションに支障を来すことになるのである。従って、言語コミュニケーションは、言語表現とコンテキストの総体であって、コンテキストによる補足可能部分が大きければ、それだけ表現が省略的になり、補足可能部分が小さければ、それだけ省略できないことになるが、反対に、補足可能部分が大きいのに余り省略しないと、くどくどした表現になってしまい、補足可能部分が小さいのに省略しすぎては、寸足らずの表現になってしまうのである。

的確さ・効率性に基づく表現の経済性は、演説、文学、その他の全ての領域でも適用できるものであると言っていいであろう。ただ、日常会話との相違は、伝達内容の違いであり、それが表現形式の違いを生み出すことになる。勿論、例えば、演説では、説得力に重心が置かれるし、文

学では、芸術的装飾性に重心が置かれる傾向があるであろう。しかし、その根底には、表現の経済性があると言える。というのは、表現の経済性を無視して、長々と演説したり、美的に飾り立てすぎたりすると、聴衆あるいは読者はうんざりするからである。従って、表現の経済性が基本となり、それに追加される部分として説得力、芸術的装飾性などが位置付けられることになる。そして、表現の経済性は、言語コミュニケーションの基礎である話し手と聞き手（あるいは、書き手と読み手）の間の理解に対するものとしてある。理解した上で、承知するかどうか、行動するかどうか、それらは次の問題であり、理解に対して追加される部分として位置付けられることになる。今述べたことをまとめると、次のようになる。

言語表現（＝表現の経済性＋説得力・芸術的装飾性）＋承知・行動

言語コミュニケーションは、コンテクストによって提供される情報が共有されるという前提で、ある人がある言語表現を使用して他の人に伝達することである。その際、全ての言語表現に共通して言えることは、的確さ・効率性に基づく表現の経済性で、関係する人達の間での理解を目標とするものである。そして、演説、文学などの領域では、あくまでも表現の経済性が基本で、その追加部分として説得力・芸術的装飾性が加えられ（基本を無視しないという条件付きで）、（表現の経済性＋説得力・芸術的装飾性）の全てが、演説者と聴衆あるいは筆者と読者の間の理解の対象になる。それに対して、日常会話では、話し手と聞き手の間の理解の対象になるものとして、説得力・芸術的装飾性を加えないものとなる。勿論、日常会話でも、説得力のある言語表現を使うことがあるが、演説などとは区別して、的確に、しかも効率よく表現すること自体に説得力があるとし、それを相手が理解し、承知するということにしておき、表現の経済性を高める限りでは、的確さ・効率性に入れ、それを越える場合には、過剰表現とすることにする（芸術的装飾性についても、同様のことが言えると思われるであろうが、そうするには問題があるので、一応除くことにする）。そのような言語表現（表現の経済性の部分のみ）を使用して、日常会話では、話し手が伝達しようと意図することを聞き手に理解させ、その上で、承知させたり、行動させたりするのであり、その話し手の意図することを聞き手が理解し、その上で、承知するかどうか、行動するかどうかははっきりする。つまり、言語表現の理解の後で、承知・行動が追加部分として加えられる。そして、聞き手にとっては、理解した上で、承知しないこともあり、話し手の思うように行動しないこともあり、承知・行動という追加部分は、実際には加えられることもあり、そうでないこともある。また、命令などの場合は、相手に行動させるが、約束などの場合は、自分の方が行動することになり、それに承知と行動が共に関わる場合もあれば、承知しか関わらない場合もあり、様々なケースが考えられる。演説、文学などでも、言語表現（表現の経済性＋説得力・芸術的装飾性）を使用して、自分が伝達しようと意図することを相手に理解させ、それを相手が理解することがまず最初に来るのであって、その上で、聴衆あるいは読者が共鳴したり、感動したり（演説、文学など）、求められるように行動したり（演説など）するのであるが、演

説者あるいは筆者が意図するようには、聴衆あるいは読者が共鳴したり、感動したり、行動したりすることがないこともあり、承知・行動（ここでは、共鳴・感動を承知の一種とするか、行動の一種とするかについては、曖昧なままに残しておくことにする）という追加部分は、加えられたり、加えられなかったりする。以上のように、日常会話にしても、演説、文学などにしても、共通部分があり、類似した構造があると言える。なお、上記のことは、あくまでも伝達に関するものであって、伝達を目的としない単なる表現を除外している。というのは、例えば、小説家が自分の考えを表現するだけの為に（読者に何かを伝達することを目的にしないで）書くことがあるが、その場合は表現の経済性が基本にはならないからである。

全ての言語表現の基本をなすのが、的確さ・効率性に基づく表現の経済性であり、比喩表現も同様であるとすれば、なぜ比喩表現を使用するかが明らかになる。前に、「彼女は、バラだ。」の例を使用した。その際、問題を複雑にしない為に、単純に「彼女は、美しい女性だ。」を意味するものとしたが、もしそうであれば、なぜ直接「彼女は、美しい女性だ。」（字義どおりの発話）と言わずに、あえて「彼女は、バラだ。」（隠喩的発話）と言うのが説明できないであろう。そこに、表現の経済性による説明の可能性が出てくるのである。では、比喩の内、特に隠喩、換喩、提喩の存在意義について、的確さと効率性に基づく表現の経済性という観点を含めながら検討することにする。

3-1. 隠喩の存在意義

隠喩については、実に数多くの著書、論文などで論じられてきており、様々な定義がなされてきている。そのことは、比喩の中で、特に隠喩が注目され、隠喩研究が中心的な位置を占めてきたし、今でも占めていることを意味する。それだけに、ここで正確な定義を示すことが容易ではないのである。例えば、哲学と言語学の分野を取り上げてみても、Grice (1975), Searle (1979), SperberとWilson (1981, 1985/6, 1986), Lakoff (Lakoff and Johnson, 1980; Lakoff and Turner, 1989; Lakoff, 1987, 1993), BachとHarnish (1979)などが、彼らの構築した一般理論の枠内で、あるいはその適用・応用として隠喩の異なる定義を行なっている（すでに前に説明しているので、繰り返さないことにする）。どちらの定義の方がより妥当性があるかどうかを明らかにする為には、彼らの一般理論自体を詳しく検討する必要があり、従って容易ではなく、さらに哲学、言語学以外の分野も含めて考えれば、一層容易ではなくなる。そこで、すでに隠喩、換喩、提喩の位置付けに関連して説明したこと（哲学と言語学の分野に関してのみであるが）以上には踏む込まないことにして、特徴を示す程度で済ますことにする。換喩と提喩も同様に扱うことにする。

比喩は、単純な言い方をすれば、あるモノを他のモノにたとえることであり（「モノ」は、物質的な物、出来事、属性、抽象的な概念などを表すものとする）、少なくとも二つのモノが関わ

ることになり、それら二つのモノの関係としてあることになる。その関係の仕方は、類似関係（二つのモノが似ている関係）、隣接関係（二つのモノが隣り合っている関係）、包含関係（一方のモノが他方のモノを内に含む関係）に分けることができる。それらは、順番に、隠喩、換喩、提喩とされ、それぞれの基本的特徴を表している。しかし、類似性にしても、隣接性にしても、包含性にしても、定義の仕方によってその広がり異なり、曖昧な部分が残るので、他の特徴を組み合わせて分類することが一つの方法として考えられる。それは、例えば、現実的・概念的な類似関係、現実的な隣接関係、概念的な包摂関係という区別（佐藤信夫, 1978, 1982; 瀬戸賢一, 1986）のように、どのようなモノを対象にするかを明らかにする為、対象領域を特定化し、現実世界における事物の関係と意味世界における類概念と種概念の関係という特徴を組み合わせることである。また、対象領域の特定化の他に、様々な特徴づけが可能であるが、一応現実的・概念的な類似性、現実的な隣接性、概念的な包摂性を基本的特徴と考えると、先に進むことにする。

隠喩の例から始めることにする。

Sam is a pig. (「サムは豚です。’) Sally is a block of ice. (「サリーは氷の塊だ。’) Richard is a gorilla. (「リチャードはゴリラだ。’) Mary is sweet. (「メアリーは甘い。’) His brain is addled. (「彼の脳は腐っている (= 混乱している)。’) Sam devours books. (「サムは本をむさぼり食う (= むさぼり読む)。’) (Searle, 1979, pp. 104–107) (『創造のレトリック』, pp. 125–130)

This room is a pigsty. (「この部屋は豚小屋だ。’) Robert is a bulldozer. (「ロバートはブルドーザーだ。’) (Sperber and Wilson, 1986, p. 236) (『関連性理論』, pp. 287–288)

The argument is shaky. (「その議論はぐらついている。’) Cognitive psychology is still in its infancy. (「認知心理学はまだその揺籃期にある。’) That idea just won't sell. (「そんな考えは売れっこない (= 受け入れられるわけがない)。’) That idea went out of style years ago. (「その思想は何年も前に流行遅れになった。’) The magic is gone. (「(恋の) 魔力がとけた。’) She is a gold-digger. (「彼女は金鉱捜しだ (= 金銭目当てに男と交際したり結婚したりする女だ。’) (Lakoff and Johnson, 1980, pp. 46–51) (『レトリックと人生』, pp. 70–87)

上記の例を見て気が付くことは、全てが文形式になっていることである。それは、決して偶然ではない。というのは、隠喩が発話全体に関わるもの、つまり発話される文の主部と述部の関係から生まれるもので、それが語句段階における指示機能に関わる換喩（指示の移動、より正確には、指示対象の移動）とは根本的に異なる特徴だからである（文と発話の相違点は、口から文を発したものが発話で、文を実際に使用したものが発話となるということであり、比喩全ては、文ではなく、発話の段階での問題であると捉えるべきあるし、また発話を文の発話とするのが一般

的で、従って換喩の場合、あくまでも発話される文の中の語句(指示表現)の指示のこととなる)。例えば、「サムは豚だ。」の場合、「サム」がサムという人物を指示し、「豚」が動物である豚を指示しているので、いずれの語にも指示の移動は起きておらず、指示には問題がないことになる。そして、文そのものを見る限り、文がそれ自体として純粹に言語的な意味を持っていることがわかるだけであり、またペットの豚の名前がサムであるというコンテキストは可能である為、文の(言語的)意味自体が問題になることはないであろう。しかし、発話の段階になると、発話のコンテキストを考慮に入れなければならなくなり、「サムは豚だ。」は、サムがペットの豚の名前であるならば、字義どおりに意味しているので、字義どおりの発話となり、サムが人間の名前であるならば、隠喩的発話になる。そこでは、サムという人間が豚であることはないので、発話される文の中の主部と述部の間の対比によって私達が隠喩と認識することになる。従って、隠喩とは、発話される文の中の主部と述部に含まれる異質で、互いに対立する二つのモノの関係のことで、しかも二つのモノの間に類似性(「サムは豚だ。」の場合、例えば、「汚らしく、だらしなく、. . . 」という点で、サムと豚が類似していることになる)が見出されることとなる。そして、二つのモノは、現実世界の事物も、意味世界の概念も入ることができるのである。

隠喩の場合、発話される言葉が基本的には文形式となるが、実際にはそうでない場合もある。例えば、二つのモノの内、一方のモノが言葉によって表されず、単に「豚!」とだけ言うことがある。それは、一語文と呼ばれるもので、発話の段階で考えれば、コンテキストによって、豚を見て言ったのであれば、字義どおりの発話となり、人間に向かって言ったのであれば、隠喩的発話となり、いずれにしても、普通の文形式に置き換えることができる。一語ではなく、語句によって隠喩的表現をすることがある。*a heated argument*(「熱い議論」), *a warm welcome*(「あたたかい歓迎」), *a lukewarm friendship*(「なまぬるい友情」)(Searle, 1979), その他様々な表現が現実的に使用されるが、例えば、「あたたかい歓迎」は、「受けた歓迎はあたたかいものであった。」と捉えて、文形式に置き換えることができる。そのように考えれば、発話が一語であっても、語句であっても、発話のコンテキストによって補えるものとし、基本的には文形式であると言えよう。ただし、実際の発話を見れば、形式上の区別によって幾つかに分類できる。瀬戸賢一(1997, pp.38-39)の分類によれば、「男は狼である」のデアル型、「仕事の山」の連結型、「美しい理論」の形容詞型、「東京砂漠」の名詞型、「新しい分野を開拓する」の動詞型、「一枚岩にひびが入った」のセンテンス型などに区別できることになる。事実、日常会話では、そのような型の発話が行なわれているが、ここではごく単純にコンテキストによって補うことで文形式に置き換え可能としておく。最後のセンテンス型については、Levin(1993, pp.116-119)によれば、発話の各構成要素間の意味的非両立性と意味的両立性によって隠喩が分類され、前掲の例が意味的非両立性に基づく隠喩と言えるものであるが、意味的両立性の場合、例えば、「汗水たらして長い階段を登ってきた。」は、意味的には完璧に理解できるので、字義

どおりの意味で発話できるが、長い階段もなければ、登ったという行為も存在しない状況で、ある中年男性が言ったのであれば、隠喩的発話となり、苦勞をいとわず、一生懸命に働いて生きてきたことを意味することになる。後者は、諷喩とも呼ばれるものであるが、隠喩の一種として扱うことにする。さらに、前掲の例などで明らかなように、名詞、動詞、形容詞、副詞といった様々な品詞を使用して隠喩的表現をすることができるが、樋口桂子（1995, p. 83）の分類によれば、それらを文という形式上で、「人間は狼である」などの名詞と名詞を結び付けたコプラ連結型の隠喩と、「山が笑う」、「目が甘い」、「この絵は騒々しい」などの動詞・形容詞の連結型の隠喩に区別できることになる。様々な品詞の結び付けによって隠喩的表現が可能となるが、より実情に即した形で、語句による隠喩と文による隠喩を使い分けて区別したのが瀬戸賢一（1995）の分類であり、統辞の働きに焦点を合わせ、命題を表す文という形式から区別したのが樋口桂子の分類であると言える。なお、問題を単純にする意味で、隠喩を文形式の隠喩と捉え（本稿では、文形式の隠喩を対象にしているが、それが妥当であるかどうかの問題は、触れずに残しておくことにする）、Levin（1995）の用語を使用すれば、意味的非両立性に基づく隠喩と意味的両立性に基づく隠喩に大別し、その上で、前者については、文の主部と述部に含まれる二つのモノには、主語としては名詞が入り、述部としては名詞、動詞、形容詞、副詞が入るとしておくことにする。勿論、日本語では、主語が省略されることがよくあるので、述部が中心となる。

隠喩的発話の内容は、どのように解釈できるであろうか。SperberとWilson（1986, pp. 236-237）によれば、「この部屋は豚小屋だ。」は、その部屋が汚くて、乱雑であることを強く含意しているが、それ以上のこと、つまりThis room is very filthy and untidy.（「この部屋はとても汚くて乱雑である。」）と単に言っただけでは十分に伝えられない程の汚さ、乱雑さのイメージを伝えようと意図していたに違いないし、「ロバートはブルドーザーだ。」は、強い含意は一つもないが、ロバートのしつこさ、頑固さ、鈍感さ、脇目を振らない様子に関係するやや弱い含意があることになる。要するに、隠喩とは、単一の言語表現が強い含意だけでなく、非常に広い範囲の弱い含意も決定してしまうことになり（ただし、強い含意が存在する場合もあれば、存在しない場合もある）、従って極度に圧縮された表現のことであると言えよう。そのことは、話し手にとっては、自分の伝達しようとするものを的確に、効率よく表す為、あえて隠喩という圧縮された表現を使用することで、強い含意と弱い含意を伝達することを意味し、聞き手にとっては、その圧縮された表現を解釈して、単に強い含意だけでなく、弱い含意も含めて理解しなければならないし、その隠喩が的確さと効率性に基づく表現であることを把握しなければならないことを意味するのである。そこに、直接的に「この部屋はとても汚くて乱雑である。」という字義どおりの発話ではなく、あえて「この部屋は豚小屋だ。」という隠喩的発話をする理由がある。しかし、隠喩的表現に伴う非常に広い範囲の弱い含意については、豚小屋に対するイメージが人によって多少異なるもので、話し手と聞き手が心に描くものに食い違いが生じるのは当然

であるが、それを避ける為に、正確で、厳密な表現をしようとすると、「この部屋は汚く、乱雑で、臭く、狭く、喧しく、不快で、．．．」という具合になり、くたくたと長い表現になってしまい、言語コミュニケーションに支障を来すことになるであろう。言語コミュニケーションを円滑に行なうには、不必要に長くすることを避けるべきで、表現の経済性が重要な位置を占めるのである。従って、字義どおりの発話によって長い表現を使用することよりも（長い表現を使用しても、自分の伝達しようと意図することが全て正確に言い表わせるかどうかは疑問であろうが）、たとえ豚小屋に関係する広い範囲の弱い含意の中の一部が食い違う危険性があるとしても、隠喩的表現を使用する方が的確で、効率的な表現になると言えることになる。

表現の経済性を基本にして、伝達しようと意図するものを的確に、効率よく表現することを目的とするならば、ある場面では、それが字義どおりの発話であったり、隠喩的発話であったり、その他の種類の発話であったりする訳で、それぞれの発話にはそれぞれの存在意義があり、他のものに言い換えることのできないものなのである。もしその部屋が汚くて、乱雑であることを伝達したいだけならば、「この部屋はとても汚くて乱雑である。」という字義どおりの発話をすべきであって、それでもあえて「この部屋は豚小屋だ。」という隠喩的発話をすれば、的確に、効率よく表現していないことになり、表現の経済性に反することになってしまい、不必要な装飾が付け加えられたにすぎないことになってしまう。なお、表現の経済性は、今述べた例でも明らかのように、必ずしも表現の長短に関わるのではなく、最小の労力で最大の効果を得ることであって、それに反する例としては、一般的には必要以上に長い表現となるが、たとえ短い表現であっても、理解するのに大きな労力を使いながら、得る効果が小さければ、同じ結果になる。結局、伝達意図を的確に、効率よく表現することが結果的に表現の経済性に基づくことになるのであって、それによって字義どおりの発話、隠喩的発話などの表現形式が決定され、また表現の長さが決定されるが、それは（特に、表現の長さ）コンテキスト依存度によって決定されることでもある。簡単に言えば、全ての言語表現にとって、的確さと効率性に基づく表現の経済性が基本にある。より詳しく言えば、的確で、効率的な表現を目指すことが、どのような種類の発話が最も適しているかを決定し、さらに同一種の発話の中で、表現の最も適した長さを決定することになるが、それに加えて、表現の長さについては、コンテキストによる補足可能部分（省略可能部分）が発話場面によって異なってくるので、コンテキスト依存度によって決定されることになる。発話の種類とコンテキストの関係は、どうであろうか。少なくとも母語、文化的背景などが同一ならば、同一のものを伝達しようと意図するのに、コンテキストによって、字義どおりの発話になったり、隠喩的発話になったり、その他の発話になったりするのは普通考えにくいであろう。しかし、全く関係ないとは言えないであろう。母語、文化的背景が異なる人達の場合だけでなく、たとえ同一の場合であっても、コンテキストによって、自分の伝達しようと意図しているものを的確に、効率よく表現するには隠喩的発話が最も適していると思いつつも、相手が理解するのに

大きな労力を使うことになるのであれば、あるいはその他の理由で、伝達したいことを十分に伝達しきれないとしても、字義どおりの発話（くたくたと長い表現ではなく、十分に伝達しきれないことを覚悟して、短めの表現を使用する）をすることがあると思われるからである。上記の例を使用すれば、的確に、効率よく表現するには「この部屋は豚小屋だ。」という隠喩的発話が最も適していると思っても、あえて「この部屋はとても汚くて乱雑である。」という字義どおりの発話をすると言えよう。そのように考えるにしても、的確さと効率性に基づく表現の経済性に反することにはならず、十分伝達しきれないとしても、つまり様々な弱い含意を全て切り捨てるとしても、それがコンテキストにとっては的確で、効率よく表現することになり、経済的に表現することになるからである。言い換えれば、伝達意図と発話の関係だけから考えれば、的確に、効率よく表現する為に最も適した発話の種類が確定されるが、それにコンテキストを加えれば、たとえ最も適した発話の種類でなくても、的確に、効率よく表現することには変わらないと言える。従って、的確さと効率性に基づく表現の経済性が、全ての言語表現の基本であることには変わらないのである。そのことは、SperberとWilsonの問題点を明らかにすることでもある。

以上のことは、隠喩だけに限ったことではなく、全ての言語表現に言えることである。さらに、もう一つ指摘することがある。Searle (1979, p. 105) によれば、例えば、「リチャードはゴリラだ。」は、「リチャードは卑劣で、たちの悪い、すぐ暴力をふるう、．．．である。」の意味で発話されることがあるが、ゴリラが実際には内気で、臆病で、神経質な動物であり、人々の信念が事実でないことを知っているとしても、長年のゴリラについての神話によってそのような意味で発話されることになる。つまり、科学的で、客観的な事実に基づくとはいえず、ある時代の、ある地域における人々の信念、人々が思い浮べるイメージに基づいているということである。従って、隠喩的表現は、一言で言えば、文化によって異なってくるのである。そのことは、隠喩だけでなく、比喩全般に言えることである。ただし、そのことが比喩の普遍性の否定を意味することにはならない。字義どおりの発話だけで全てを表現するには言語そのもの（さらには、言語を使用する人間の認識）に限界があり、その意味で、どの言語であれ、必要不可欠な要素として比喩的表現が広く、深く浸透しているからである。言語にとっての必要不可欠な要素である比喩的表現は、具体的に様々な言語表現として表される。そして、具体的な表現形式は、類似した文化同士は勿論であろうが、異なる文化の間でも、基本的な生活の仕方に同一性あるいは類似性がある為、そして他の文化の影響を強く受けている場合、異文化接触が頻繁になるつれて、生活の仕方、行動の仕方、考え方などが類似してくる為、さらにその他の理由で、同一あるいは類似のもの（勿論、使用する言語は異なるが）になる可能性が十分あり、事実英語と日本語の間では、日本語に直訳するだけで、そのまま比喩的表現として使用できる例が多くある。それに対して、文化によって、さらには個人によって、具体的な表現形式が異なることも事実である。重要なこ

とは、比喩的表現が本来人々の信念あるいはイメージに基づくものであるということである。そして、その信念あるいはイメージが科学的・客観的事実と一致することもあり、食い違うこともあるが、食い違う場合、誤解あるいは偏見を生み出す限りでは、信念あるいはイメージが科学的・客観的事実によって修正され、そのような表現形式は排除される傾向がある一方で、誤解あるいは偏見を生み出さない限りでは、文化固有の伝統的な表現形式として残される傾向があるということである。あらゆる差別的な表現を避け、文化固有の伝統的な表現を尊重する傾向は、比喩的表現のみならず、全ての言語表現に見られるものである。

隠喩的表現について、具体的に見ることにする。すでに述べたように、的確さと効率性に基づく表現の経済性が全ての言語表現にとっての基本であり、それに伝達意図の内容とコンテキストを加えることで、どのような表現形式（発話の種類と発話の長さ）を使用するかが確定される。従って、隠喩的表現を使用するという事は、少なくとも話し手にとっては、それ以外の表現形式では自分の伝達意図を的確に、効率よく表現できないと思うからであり、正にそのようなものとしてあることを意味する。聞き手に対しても、そのような意味で、相手が自分の伝達意図を的確に、効率よく理解することができると思うからこそ、隠喩的表現を使用すると言える。そこでは、正確で、厳密な伝達ではなく、的確で、効率的な伝達が日常会話における目的となっている（勿論、日常会話において、正確で、厳密な伝達が求められることがないということではない）。もしそうであれば、従来のように、また現在でもよく見られるように、隠喩的発話から字義どおりの発話への言い換え（つまり、隠喩的発話と同義の字義どおりの発話への言い換え）は不可能になるであろう。例えば、「サリーは氷の塊だ。」は、Searleによれば、「彼女は冷淡だ。」の意味で隠喩的に発話されることになる。もしそうであれば、「サリーは氷の塊だ。」という隠喩的発話を「サリーは冷淡だ。」という字義どおりの発話に言い換えることができることになる。しかし、彼女の冷淡さを伝えることだけが話し手の伝達意図であるならば、「サリーは冷淡だ。」という字義どおりの発話を最初からすれば十分であって、それをあえて「サリーは氷の塊だ。」と言うのは、単に余分な装飾を付け加えただけになってしまう。「サリーは氷の塊だ。」＝「サリーは冷淡だ。」ではないのである。隠喩的発話をするにはそれなりの理由があり、そこに隠喩の存在意義を認めなければならないのである。単なる冷淡さではなく、どの程度の冷淡さであるのか、さらにどのような種類の冷淡さであるのかを同時に表現し、理解されるのである。そこに、なぜ氷にたとえて、それ以外のものではないのかの意味がある。ただし、氷にたとえることは、すでに慣習化されており、例えば、雪、みぞれなどのように、氷以外のものにたとえることは無理であろう。それでも、氷にたとえる以上、単に冷淡さを表しているのではない。氷の塊→冷たさ→冷淡さという連想は、私達がよく行なうことであり、私達が容易に認識できる顕著な性質であることは確かであるが、温度の冷たさだけでなく、冬の寒い時期、北の寒い地域など、様々なことを氷について思い浮べるであろう。それらの総体として、つまり温度の冷たさ（顕著な性質あ

るいは強い含意)を核にしなが、それ以外の様々なこと(顕著でない性質あるいは弱い含意)を一まとめにして、話し手が表現し、聞き手が理解するのである。簡単に言えば、単なる冷淡さではなく、氷に似た冷淡さのことである。その「氷に似た」に、冷淡さを量的にも(冷淡さの程度)、質的にも(冷淡さの種類)強調し、明らかにしていることが表されていると言えるのである。

隠喩の存在意義は、量的特徴と質的特徴を明確にする必要がある時に、それらを圧縮した形で、ある語句を隠喩的に使用することにあると言える。従って、隠喩的発話を同義の字義どおりの発話に言い換えるには、量的な程度と質的な種類を言い表わさなければならないことになり、表現の経済性に反する結果になる。しかし、仮に字義どおりの発話で表現するにしても、果たして可能であろうか。例えば、冷淡さの種類を隠喩(さらに、直喩を含む比喩全般)を全く使用しないで表現できるかは極めて疑問であるし、冷淡さの程度にしても、「とても」、「非常に」などの言葉を付け加えることはできるが、どの程度なのかをはっきり言い表わすのに、隠喩などを全く使用しないで可能であるのかも疑問であろう。結局、的確さと効率性に基づく表現の経済性によって、各場面にとって適した表現形式が選ばれるのであって、それを別の表現形式に言い換えること自体が無理なのである。なお、的確に、効率よく表現するという意味は、隠喩的発話以外には表現しようがなく、字義どおりの発話に言い換えること自体が不可能であるということになるが、たとえ字義どおりの発話に言い換えることが可能であるとしても、ただ表現が長くなるので避けるということも含むものとしておく。例えば、「彼女はバラだ。」という隠喩的発話は、単に「彼女は美しい女性だ。」を意味するだけでなく(それが顕著な性質あるいは強い含意であることは確かで、醜い女性を意味しているのではない)、花にたとえ、しかも花の中のバラにたとえることで、言い換えれば、花以外のものにたとえず、バラ以外の花にたとえないことで、美しさの程度と種類をも含めて、それらの総体を圧縮した形で表現しているのであり、それと同義の字義どおりの発話に言い換えること自体が不可能なのである。「認知心理学はまだその揺籃期にある。」という隠喩的発話も同様で、単に「認知心理学はまだ発展の初期段階にある。」を意味するだけでなく、人間の一生の内の幼年時代にたとえることで、幼い子供がよちよち歩きで、物にぶつかって怪我をしたりしながらも、徐々に成長していく姿を思い浮かばせ、学問発展の初期段階がどのような状態(一般的には、初期、中期、後期に区別されるが、初期の内のどの時期なのか(量的特徴の明確化)、初期と言っても、問題もなく全て順調に進んだのか、問題を乗り越えながら、一步一步着実に進んだのか、紆余曲折を経て、苦労しながら進んだのか、どのような発展の初期段階なのか(質的特徴の明確化))になっているかも含めて、それらの総体を圧縮した形で表現しているのであり、「認知心理学はまだ発展の初期段階にある。」という字義どおりの発話では、無味乾燥な初期段階が表現されるだけで、「揺籃期」という表現に含まれている様々なことが言い表わされないままに残ってしまう。ただし、Lakoffなどの例の中心は、いわゆる死喩と言わ

れるような慣習的隠喩であり、字義どおりの意味との関係からではなく、直接的に隠喩的意味を理解できる隠喩のことである為、今述べたように、隠喩的発話の字義どおりの意味（「揺籃期」という表現の字義どおりの意味）に関する解釈は不必要になるであろうが、慣習的隠喩であれ、非慣習的隠喩であれ、字義どおりの意味が何らかの形で関わっているのであり、その存在意義を認める必要があり、それを受け入れる限りでは、上記の解釈も可能であろう。

3-2. 換喩と提喩の存在意義

隠喩の特徴は、発話される文の中の主部と述部に含まれる二つのモノの間の類似関係を基本とするものであった。ただし、実際の発話では、いつも必ず文形式になるとは限らず、そこで現前の隠喩と不在の隠喩に区別されることがよくある(例えば、「サムは豚です。」と「豚(だ)！」の区別で、関係する二つのモノがいつも必ず言い表わされるのではない)。また、樋口桂子(1995, pp. 84-86)によれば、動詞・形容詞の連結型の隠喩（「山は笑う」など）も不在の隠喩とされている。それはともかくとして、全ての言語表現について、言語使用の段階、つまり発話の段階では、文形式の発話が最小単位であると言える。それは、ある考えなどを言い表わすのに必要な最も小さな単位と考えられるからである(勿論、発話のコンテキストによって明らかで、すぐに補える部分は、表現の経済性に基づき省略されるので、実際にはいつも必ず文形式になるとは限らないが)。そして、そのことは、換喩と提喩にも言えることで、発話される文全体の中で捉えることが必要となる。そのように考えていくと、発話される文全体の中で捉え、しかも二つのモノに関係しているという点で、類似関係、隣接関係、包摂関係などの関係の仕方に相違があるとしても、換喩と提喩を隠喩と同等に扱ったり、隠喩の中に入れてたりする見解が出てくるのも、ある種の自然な流れと言えるかもしれない(例えば, Searle, Sperber と Wilson など)。どこで線を引くのか、さらに線を引いて細分化する必要があるのかなどの線引の問題であり、視点の問題であって、単純に誤りだとして片付けることもできないであろう。しかし、少なくとも比喩の問題を取り上げる以上、全てを一様に処理することで、互いに異なる特徴を無視し、それぞれの存在意義を否定することは、本来の姿を曖昧にし、混乱・誤解を招くだけで、避けるべきである。そこで、換喩と提喩についてまず言えることは、すでに前に述べたように、それらが「言われること」に属するのに対して、隠喩が「含意されること」に属するという根本的な相違が存在し、また発話される文全体の中で捉える必要があるということでは変わらないが、隠喩があくまでも文全体(主部と述部の関係)の中でのみ機能し、そのようなものとして認識されるのに対して、それらは文の中の一部である語句の段階で機能し、関係する二つのモノの一方が言い表わされず、そのようなものとして認識されるという相違が存在することである。

換喩と提喩の例から見ることにする。

イギリスの君主をthe Crown（「クラウン(王冠)」）と呼ぶ。

アメリカ合衆国の行政府をthe White House（「ホワイト・ハウス」）と呼ぶ。

S is P（「SはPである」）と言って、S is R（「SはRである」）を意味する場合、PとRの関係は、部分－全体の関係、含むもの－含まれるものとの関係、衣類と着用者の関係などである。そして、隠喩と同様に、P項の意味内容がR項の意味内容を伝えており、従って換喩と提喩が隠喩の特殊事例となる。（Searle, 1979, p. 107）（『創造のレトリック』, pp. 131-132）

部分－全体の関係：

There are a lot of *good heads* in the university.（「その大学にはよい頭（＝知能の高い人）が大勢いる。」）

We need some *new blood* in the organization.（「組織には新しい血（＝新加入者）が必要だ。」）

We don't hire *longhairs*.（「長髪（の人）は雇わない。」）

製造者－製品の関係：

He bought a *Ford*.（「彼はフォード（社製の車）を買った。」）

He's got a *Picasso* in his den.（「彼は書齋にピカソ（の作品）をもっている。」）

I hate to read *Heidegger*.（「ハイデッガー（の著書）は読みたくない。」）

使われる物－使う人の関係：

The *sax* has the flu today.（「サクソフォン（奏者）は、きょうは流感にかかっている。」）

We need a better *glove* at third base.（「三塁にはもっとうまいグラブ（＝選手）が必要だ。」）

The *buses* are on strike.（「バス（の運転手たち）はストを決行中です。」）

コントロールする者－コントロールされるものとの関係：

Nixon bombed Hanoi.（「ニクソン（政府）はハノイを爆撃した。」）

Napoleon lost at Waterloo.（「ナポレオン（軍）はワーテルローで敗れた。」）

A Mercedes rear-ended *me*.（「ベンツが私（の車）に追突した。」）

公共機関－責任者の関係：

Exxon has raised its prices again.（「エクソン（の責任者）はまた値上げをした。」）

You'll never get the *university* to agree to that.（「大学（当局）にそれに同意させることは絶対にできないだろう。」）

I don't approve of the *government's* actions.（「私は政府（当局者）の行動を承認できない。」）

場所－公共機関の関係：

The *White House* isn't saying anything.（「ホワイトハウス（＝米国政府）は何も言っていない。」）

Paris is introducing longer skirts this season.（「パリ（＝フランスのファッション界）は、

今シーズンはこれまでよりも丈の長いスカートを発表している。」)

Hollywood isn't what it used to be. (「ハリウッド(=米国映画産業)は昔日の面影がない。」)

Wall Street is in a panic. (「ウォール街(=米国金融業界)は恐慌状態にある。」)

場所-出来事の関係:

Pearl Harbor still has an effect on our foreign policy. (「真珠湾(の奇襲攻撃)はいまだにわが国の外交政策に影響を及ぼしている。」)

Watergate changed our politics. (「ウォーターゲート(事件)はわが国の政治を変えた。」)

It's been Grand Central Station here all day. (「ここは一日中グランド・セントラル駅だ(=グランド・セントラル駅のように混雑している)。」)

伝統的修辞学者たちが提喩と呼んでいるもの(部分-全体の関係)を換喩の特殊事例としてその中に含める。そして、隠喩の主要な機能が理解であるのに対して、換喩の主要な機能が指示となる。(Lakoff and Johnson, 1980, pp. 36-39) (『レトリックと人生』, pp. 54-59)

Searleの場合、「SはPである」と言って、「SはRである」を意味することを基準にして分類する為、その中に間接的言語行為のみならず、隠喩、換喩、提喩も含まれることになるが、間接的言語行為との相違を根本的なものとして明確に区別する一方で、残り三つについては、隠喩を純粹な型とし、その中に換喩と提喩を入れている。しかし、隠喩の場合は、「SはPである」(例えば、「サリーは氷の塊だ。」)のSとPの類似性からR(冷淡さ)を絞り出して、「SはRである」(「サリーは冷淡だ。」)を得ることになり、一般的には、SとPの間には類似関係が存在するが、PとRの間には類似関係が存在する場合もあれば、そうでない場合もあることになる。もしそうであれば、Searle自身ははっきりと述べていないが、隠喩の特殊事例であり、ただPとRの関係が部分-全体の関係などとなる点だけが異なるのであれば、「彼はクラウン(王冠)だ。」の彼と王冠の類似性から君主を絞り出して、「彼は君主だ。」を得ることになってしまう。しかし、彼と王冠の類似性から君主を導き出すのではなく、王冠から君主を導き出すと言えよう。つまり、文全体の中で捉え、しかも主部と述部の関係(SとPの関係)そのものを問題にし、その関係からRを導き出すのが隠喩であって、換喩と提喩の場合は、文全体の中で捉える必要があるが、実際に問題になるのは語句(P)で、そこからRを導き出すのである。従って、関係する二つのモノの中身が異なることになり、SとPの類似関係(結果的には、PとRの関係になるが、そこには必ずしも類似関係がいつも存在する訳ではない)に対するPとRの隣接関係、包摂関係という明確な相違が存在するのである。勿論、Searleが今述べたことを承知の上で、それでも換喩と提喩を隠喩の一部として捉えるべきであると主張すると解釈できる(「SはPである」→R→「SはRである」という過程が共通しており、その中でPとRが必ず関係しているという意味から言えば、そうなるであろうし、ただPとRの関係の仕方に相違が生まれるにすぎないとなろう)。しかし、隠喩、換喩、提喩を全体(Searleの言語行為理論)の中でどのよう

に位置付けるかは別にして、少なくともそれら三つの比喩に焦点を合わせて考えれば、明らかに相違が存在し、決して無視できない相違である以上、何らかの形での区別がはっきりと示されるべきであろう。なお、S, P, RをSearleに従って便宜的に使用したが、あくまでも比較しやすくする為で、実際にはそう単純にはいかない。例えば、全てが「～は～である」という文形式になる訳ではないし、換喩と提喩で問題になる語句がPに限定される訳でもないのである。

換喩と提喩の関係は、どうであろうか。まず言えることは、提喩を換喩の中に含めてしまう捉え方が広く受け入れられているということである。Lakoffなども、そのような捉え方をする。上記のLakoffとJohnsonの換喩の例を見ると、全てが現実世界における事物の関係として捉えられており、物理的な包含関係（部分－全体の関係）と隣接関係（その他の関係）の相違は示されているが、二つの概念領域が関係するのが隠喩で、単一概念領域しか関係しないのが換喩（その特殊事例としての提喩）であるという区別の仕方の為（Lakoff and Turner, 1989, p. 103）、提喩独自の存在意義は認識されずにいる。そのことは、提喩の特徴を部分－全体関係とする伝統的な捉え方を批判し、むしろその部分－全体関係を隣接関係と同様に処理できるものとして、換喩から独立した存在ではなく、換喩の単なる特殊事例とすることで、提喩の存在意義そのものが消滅してしまった結果であると言える。しかし、伝統的な捉え方では、部分－全体関係は、物理的な包含関係と概念的な包摂関係を含むものとしてある。物理的な包含関係は、現実世界における事物に関する部分と全体の関係（「長髪は雇わない。」において、「長髪」（部分）が「（長髪の）人」（全体）を表す関係）のことであり、概念的な包摂関係は、意味世界における類概念と種概念の関係（「お花見に行くつもりです。」において、「花」（類）が「桜」（種）を表す関係）のことであり、従って厳密な言い方をすれば、物理的な包含関係の方が「部分－全体関係」という表現に適していることになる。ともかく、提喩独自の存在意義を認めない研究者に見られる傾向の一つに、物理的な包含関係と捉えた上で、その独自性・独立性を否定することがあると言える。上記の例を使用すれば、「組織には新しい血が必要だ。」において、「新しい血」（部分）が「新加入者」（全体）を表すように、血が人間の一部分であるような部分－全体関係が、「三塁にはもっとうまいグラブが必要だ。」における「グラブ」と「野球選手」の関係には見出されず、見出されるのは隣接関係であり、その意味で、一方を提喩と呼び、他方を換喩と呼ぶとされてきたが、それら両関係の間には、相違を認めながらも、互いに独立した、独自の機能・効用を持つものとして明確に区別するだけの質的相違はないということである。つまり、Searle的に言えば、SとPの関係からではなく、Pに関する比喩的機能を問題にしている点で、Lakoff的に言えば、二つの概念領域にまたがるのではなく、単一概念領域内における写像を問題にしている点で、換喩と提喩には同一のメカニズムが見出されるからである。勿論、関係する二つのモノの中身が現実的な事物であり、発話される文の一部である語句に関する比喩的機能であり、それらのことを考えれば、明確に区別するだけの根拠はなく、隣接関係、むしろ密接関

係（隣り合っている関係だけでなく、部分と全体の関係も含めて、密接に関係すること）の中に部分－全体の関係を含めて、提喩独自の存在意義を認めないとするのは、十分妥当性のあることだと思われる。従って、提喩を物理的な包含関係と特徴づける限りでは、Lakoffの捉え方に妥当性があると言ってもいいであろう。

では、もう一方の概念的な包摂関係は、どうであろうか。それでも、物理的な包含関係の場合と同様に、提喩の独自性・独立性を否定することになるのであろうか。部分－全体の関係の両義性を明確にしたグループ μ （1970, pp. 194-197）の見解を利用して、肯定的立場を表明するのが佐藤信夫（1978, pp. 181-189）であり、それを受け入れるのが瀬戸賢一（1986, pp. 161-164）であり、さらに両者の見解を受け入れるのが久米博（1992, pp. 134-139）である。そして、瀬戸賢一は、換喩が現実世界における隣接関係に基づくものであるのに対して、提喩が意味関係における包摂関係に基づくものであると佐藤信夫が明確に区別したにもかかわらず、その区別の意義を認めず、そればかりか、後者を前者の一種とする旧弊な態度がごく普通に見られるとして、Lakoffを批判している。Lakoffにとっては、すでに述べたように、単一の概念領域内の写像を基準にして分類しており、その性質を共有する限り、同様の処理がなされるのであり、上記の物理的な包含関係であっても、たとえそれが概念的な包摂関係であっても、基本的には変わらないのである。それは、分類上の問題なのである。それに、換喩と提喩の質的相違を認めるにしても、それらが隠喩と同一レベルでは処理できないものとしてまず区別する必要がある、その上での区別を問題にすべきである。そこで、それらの質的相違を見出せるかどうかを見なければならぬ。そこで、グループ μ の部分－全体の関係の両義性に関する主張をごく簡単に言えば、次のようになる。「木」を例にして、実際の木にも、木概念にも、「木」という言葉を使用しているが、そこには根本的に異なる二つの関係の仕方がある。

Ⅱ様式：木＝枝と葉と幹と根・・・・・・・・

Ⅲ様式：木＝ポプラあるいは柏あるいは樺・・・・・・・・

全体を部分に分解する様式には、木を枝、葉、幹、根などに分解する様式Ⅱ（物質的）の分解、それに木をポプラ、柏、樺などに分解する様式Ⅲ（概念的）の分解がある。そして、Ⅱ様式の場合には、物質的宇宙における木と枝などのような全体と部分の関係があり、Ⅲ様式の場合には、意味的宇宙における木とポプラなどのような上位クラスと下位クラスの関係、つまり類と種の関係がある。なお、グループ μ の主張には問題点もあり、素直にそのまま受け入れることはできないが、部分－全体の関係の両義性については、十分評価できるもので、提喩の存在意義を考える上で、重要な手掛りになるものと言える。というのは、部分－全体の関係には、物質的宇宙における全体と部分の関係と意味的宇宙における類と種の関係、簡単に言えば、物理的な包含関係と概念的な包摂関係という質的に異なる二つの要素が入り込んでおり、その質的相違を認めれば、提喩を物理的な包含関係の観点から見れば、現実的な事物に関わるという点で、換喩と同一レベ

ルで処理できる可能性を示すが、概念的な包摂関係の観点から見れば、換喩と同一レベルでの処理可能性には疑問を抱かざるをえないと思えるからである。そこで、そのような質的相違（関係する二つのモノが物質的宇宙と意味的宇宙のどちらに属するのか）が、換喩と提喩を区別する上で、十分な根拠を提供してくれるのが問題になる。

隣接関係、包含関係、包摂関係について、具体例で比較することにする。なお、前者二つが現実世界における事物の関係で、最後が意味世界における類概念と種概念の関係であるとして、話を進めていく。「昨日、初めてプラトンを読んだ。」は、プラトンという人間を読むことはできないので、プラトンの著書を読んだことを意味する。そして、「プラトン」と「プラトンの著書」の関係は、プラトンという人間の一部分として彼の著書があるのではなく、隣接関係にある。それは、話し手が「プラトン」を指示することによって「プラトンの著書」を指示するという具合に、「プラトン」からそれと隣接関係にある「プラトンの著書」へと指示対象が移動したことを表すものである。次に、「友人に車を修理してもらうことにした。」は、車全体を丸ごと修理してもらうのではなく、車の一部である故障したエンジンを修理してもらうことを意味し、「車」と「エンジン」の関係は、全体と部分の関係になる（なお、「車」自体、字義どおりの意味では「車輪」となるが、現在では「自動車」を指すことが多く、従って「車（輪）」（部分）が「自動車」（全体）を表すことになり、ここでは二重の部分－全体の関係が見られる）。そこでは、話し手が「車」を指示することによって「エンジン」を指示しており、指示対象の移動が起きたのであり、両者の間には部分－全体の関係がある。さらに、「母は、今花に水をやっています。」は、花一般に水をやることなど無理な話で、例えば、庭に咲いているチューリップに水をやっていることを意味している。そして、「花」と「チューリップ」は、類概念と種概念の関係にある。話し手が「花」によって「チューリップ」を指示しているのであり、類と種の関係に基づいて、「花」（類）から「チューリップ」（種）へとの的を絞っていく、花の特定化と言え、厳密な意味では、一番目と二番目の例のような指示対象の移動が起きたとは言えないであろう。なぜ、「厳密な意味」と言うかは、Recanati (1993, pp. 294–295) によれば、比較しやすいように同じ例を使用すれば、「花」という概念（類概念）を表現することで、提喩的過程を通して「チューリップ」という概念（種概念）の活性化のきっかけになることも、一種の移動であるとされるからである。ともかく、「昨日、初めてプラトンを読んだ。」（隣接関係）のように、典型的な換喩的移動とは異なっており、その意味で、Recanatiの言う提喩的移動として区別するのも一つの方法であるが。上記の最初の二例では、指示対象の移動が起きるのに対して、最後の例では、そのような移動が厳密には起きないことになり、結局概念的な包摂関係は、現実的な事物に関わる隣接関係と包含関係とは質的に異なり、包含関係が換喩に入れられるとしても、それとは独立した、独自の存在意義を持つことになり、従って提喩の特徴とされてきたものの内、物理的な包含関係は、隣接関係と共に、換喩を特徴づけるものとするにしても、もう一方の概念的な包摂関

係は、提喩を特徴づけるものとしてあることになろう。なお、隣接関係と包含関係をまとめて、一応隣接関係と呼ぶことにする。

さらに、省略性を見ることにする。樋口桂子(1995, pp. 29-38)は、リュウエ(1975, p. 205, p. 216)の冗長性の除去という考え方を引き合いに出して、換喩の基づく隣接性が省略によって生まれた副産物であり、省略が隣接の観念を生み出したと言う。例えば、「私はバルザックを再読したところだ。」(リュウエ, p. 215)について言えば、「私はバルザックの書いた作品を再読したところだ。」の内、「の書いた作品」が省略され、その結果そこに偏差が生まれ、それにより「バルザック」と「バルザックの書いた作品」の間に隣接性が生み出され、それが換喩と命名されたということになる。勿論、省略によって換喩が成立するとしても、単純な語句の省略によるものとそうでないものがあり、共にコンテキスト(社会的、文化的、歴史的状況など、発話の時点で、相互理解を可能にさせる背景全てを含む)による補足可能部分によって確定される省略可能部分に基づくものでなければならない。重要なことは、すでに前に述べたように、換喩と提喩が「言われること」に属し、隠喩が「含意されること」に属するということであり、特に「言われること」に含まれる拡充(コンテキストによる言語的意味の拡充)という考え方である。拡充と換喩・提喩を単純に同一視できるかどうかは、詳しい検討が必要であるが、ここではごく単純に拡充という考え方を利用することにする。例えば、「全員がやってくる。」という発話について、コンテキストによって補足すれば、「私のクラスの全員が、パーティーにやってくる。」が得られるとしよう。まず最初に、どこにやってくるのかが不明な為、完全な命題にする為にうめなければならない隙間が生まれ、その隙間に「パーティーに」を埋めることで完全な命題になり、さらに、完全な命題であっても、発話によって話し手が意味することと一致させる必要があり(「全員がパーティーにやってくる。」と言っても、世界中の人がやってくることを話し手が意味しているのではないから)、完全な命題を入れて、より豊かな命題を取り出す為に、「私のクラスの」を加えることになる。そのように考えると、拡充には二つのタイプの拡充が含まれていることになる。研究者によって呼び方が異なるが、取り敢えずRecanatiの飽和(第一のタイプ)と強化(第二のタイプ)を使用する。もし飽和と強化が利用できるのであれば、省略そのものではないが、省略された部分の補足の仕方に二つのタイプがあることになり、それによって換喩と提喩の質的相違を明らかにすることができるかもしれないであろう。

では、拡充における飽和と強化という異なる二つのタイプを利用して、どのような説明ができるであろうか。瀬戸賢一(1986, 1997)の例を使用することにする。換喩については、「ナベ(の中身の具)が煮える。」、「テーブル(の上のもの)を片付ける。」、「水槽(の中の水)があふれている。」、「会場(にいる聴衆)がドッとわいた。」など、さらに「メガネ(のレンズ)が曇った。」、「私はろうそく(の火)を吹き消した。」、「彼は電話(の受話器)をとった。」などがある。前者が隣り合っている関係で、後者が全体が部分を表す関係である。以上の例で、

ナベ自体が煮えたり、水槽自体があふれたり、会場自体がドッとわいたりすることは、現実的には不可能であるし、またメガネ全体が曇ったり、ろうそく全体を吹き消したり、電話全体をとったりすることも、現実的には考えられない。言い換えれば、それらの発話は、ある種の矛盾を感じ取れるが、実際には矛盾ではない以上、それら不完全な命題を完全な命題にする為には、コンテキストによって埋めなければならない隙間があることになり、その隙間に埋めるのが括弧内のものであり、その意味では、飽和のタイプに類似したものと言える。ただし、「テーブルを片付ける。」は、字義どおりの意味に受け取って、テーブルを他に場所に移動させて、片付けることも可能であるが、あるコンテキストが与えられれば、テーブルの上のものを片付けることを意味するのは、簡単に理解できることである。従って、その発話そのものは、コンテキストによって、完全な命題を表現したり、しなかったりすることになるが、一応不完全な命題を表現していると受け取ることにする。次は、「天気(晴天)だ。」、「健康(からだの状態が良いこと)が一番。」、「薬(麻薬)を打つ。」などで、類で種を表す関係である。以上の例は、晴天が天気の一つであり、良好状態が健康の一つであり、麻薬が薬の一つである以上、それ自体に問題があるのでも、矛盾を感じ取るのでも、不完全な命題を表現するのでもなく、ただ話し手の意味していることが、天気一般、健康一般、薬一般ではなく、ある特定化されたもの、つまり晴天、良好状態、麻薬であって、その意味では、強化のタイプに類似したものと言える。もし今述べた解釈が可能であるならば、そのような相違は、現実的隣接性と概念的包摂性の質的相違から生み出されたものであり、従って換喩と提喩を明確に区別できることになろう。

以上、指示対象の移動の有無、コンテキストによる補足の仕方の相違を見てきたが、現実的隣接性と概念的包摂性の質的相違に基づく換喩と提喩の区別が可能であることを示していると言えよう。しかし、気を付けなければならないことは、隠喩とは根本的に異なり、それがまず第一の区別であり、第二の区別が換喩と提喩の間であるが、互いに質的に異なる性質を持っている一方で、共通する性質もあり、それが解釈の食い違いを生み出し、結果的に異なる位置付けになるということである。その意味で、換喩と提喩の関係について、共通性に力点を置くあまり、同一レベルで処理しようとするのも、全く根拠がないとは言えないが、少なくとも質的相違を認める限り、何らかの明確な区別が必要である。

最後に、的確さと効率性に基づく表現の経済性という観点から、換喩と提喩を簡単に説明することにする。まず言えることは、隠喩と比較すれば、構造的にはそれ程複雑ではないということである。というのは、拡充と同様の段階で処理できるとすると(単純な同一視が可能かどうかは別にして、拡充の考え方を利用して、同様の処理の仕方は可能であろう)、言語的意味の延長線上に位置するものとして、コンテキストによる言語的意味の拡充と同様に、換喩的表現と提喩的表現における省略部分をコンテキストによって補足することで、話し手の伝達意図が理解されるからである。単純な言い方をすれば、省略性に基づく表現の経済性となる。しかし、ただ単に

省略性に基づく表現の経済性と言っただけでは、済まないであろう。つまり、単純な語句の省略と単純な語句の補足で済むとするのではなく、コンテキストによってどこまで補足することができるかが重要で、その範囲内であれば、どのような形の省略も可能であるとしなければならないからである。そこで、問題となるのは、省略をどのような形でするかである。第一に考えられるのは、顕著な特徴を際立たせることである。例えば、「髭」、「のっぽ」、「メガネ」などによって、ある特定の人を指示することがある。第二は、文化的・社会的・歴史的背景との関わりである。例えば、「角帽」で「大学生」を表すことがあった。勿論、角帽が当時の大学生の顕著な特徴であったと言うことはできよう。しかし、重要なことは、ある特定の文化圏、地域、時代において、人々が顕著な特徴として認めるもの、あるいは感じ取るものでなければならないということである。その顕著な特徴は、科学的・客観的事実に裏付けされたものではなく、文化的・社会的・歴史的影響の下で人々が抱く一種のイメージによるものである。従って、顕著な特徴と言われるものについて、人々の抱くイメージが科学的・客観的事実と一致するとは限らない。では、第一との相違は、どこにあるであろうか。例えば、生徒が学校の先生を「髭」、「のっぽ」、「メガネ」などと呼ぶにしても、生徒以外の人々が同じ呼び方をするとはいえずとも言えない。それは、顕著な特徴に関するイメージが違っていることを意味し、結局ある集団に共通するイメージとして顕著な特徴があることになる。第三は、話し手がある特徴を際立たせることによって、自らの伝達意図を明確にすることである。例えば、*The Times hasn't arrived at the press conference yet.* (Lakoff and Johnson, 1980, pp. 36-37) (「タイムズはまだ記者会見にきていない。」) の場合、「タイムズ」は、ある記者を指示するだけでなく、その記者が代表となっている新聞社の重要性も暗示しているのであり、仮にその記者がスティーブ・ロバーツであるとしても、「スティーブ・ロバーツはまだ記者会見にきていない。」と言い換えることはできないことになる。つまり、「タイムズ社の記者であるスティーブ・ロバーツ」の中のどの部分を省略して、どの部分を言葉に出すかによって、話し手が何を重要視し、真に伝達しようと意図することが何かを明確に強調することができるのである。以上の三つは、相容れない関係にあるのではなく、組み合わせあって現れるものである。そして、それら三つによって、単なる省略性に基づく表現の経済性ではなく、的確さと効率性に基づく表現の経済性であることが明らかになるであろう。簡単に言えば、伝達しようと意図する内容を的確に、効率よく相手に伝え、それを相手が的確に、効率よく理解できるようにする為に、省略可能部分を省略するのであって、決して単純に言葉数を減らせばいいのではない。

今述べたことは、特に換喩について言えることであって、提喩にはうまく当てはまらない。例えば、ウェトレス同士の会話の中で、*The ham sandwich is waiting for his check.* (Lakoff and Johnson, 1980, p. 35) (「ハムサンドイッチが勘定を待っている。」) と言われる場合、ハムサンドイッチを注文した人を指示しているが、それ以外にも様々な言い方が可能である。食

べているもの、服装、身体的特徴、身につけているもの、その他のもので、言い方は様々である（上記の第三、さらに加えれば第一も）。それに対して、提喩の場合は、概念的包摂関係という制約がある為、それ程選択の幅はない。瀬戸賢一（1997, pp. 49-55）の例を使用して言えば、類で種を表す関係には、「天気（晴天）だ。」、「健康（からだの状態が良いこと）が一番。」、「薬（麻薬）を打つ。」、「車（タクシー）を拾う。」などがあり、種で類を表す関係には、「パン（食物）を稼ぐ。」、「米（食物）が買えない。」などがある。そこには、類から種へとの絞る方向、その逆に、種から類へとの広げる方向があり、その範囲内に入るものだけに限定され、またその範囲内でも、薬→胃腸薬、スパゲッティ→食物などは無理で、慣習化された例が多く、従って上記の第二が中心になる。

的確さと効率性に基づく表現の経済性について、前述した例を使用して説明することにする。なお、すでに述べてきたことでかなり明らかになっていると思われるので、簡単な説明で終えることにする。ともかく、重要なことは、字義どおりの発話ではなく、あえて換喩的発話あるいは提喩的発話をするにはそれなりの理由があり、字義どおりの発話に言い換えることができず、無理に言い換えれば、話し手の真の伝達意図とは食い違ってしまうということである。「昨日、初めてプラトンを読んだ。」から始める。「プラトン」は「プラトンの著書」を表しているが、単に本であるとか、『国家』などの著書名ではなく、あえて「プラトン」と言うには理由がある。つまり、重要な部分だけを言い表わし、それ以外の部分を省略することで、大哲学者であるプラトンの思想に触れ、その喜び、驚きなどを強調したいのであり、正にそれが話し手の伝達しようとする意図したことの中心であり、そのことを際立たせる為に必要な手段であったはずである。「友人に車を修理してもらうことにした。」では、「車」が「（車の故障箇所）エンジン」を表しているが、なぜそうする必要があるのであろうか。もし車の専門家あるいは車に詳しい人に対して言うのであれば、故障箇所を詳しく言っても構わないであろうが、相手が普通の人であれば、詳しく故障箇所を言っても理解できないであろう。むしろ、「車」と言うことによって、自分の車が故障して困っており、修理しなければならないこと（具体的に、どこが故障しているかは問題ではない）を伝えることが重要で、それが話し手の伝達意図の中心であったと言える。以上の二つの換喩の例は、それ自体では不完全な命題しか表さず、隙間をコンテキストによって埋めることで、完全な命題になる例である。しかし、完全な命題にするということは、その完全な命題を全て言葉で表現すべきであるということの意味するのではない。もしそうであれば、字義どおりの発話に言い換えることができることになってしまう。そうではなくて、不完全な命題しか表現していない発話を聞いて、相手が言われたことを理解する為に、完全な命題にした形で理解するのである。さらに、不完全な命題しか表現していない発話をあくまでもそのものとして理解し、なぜある部分が省略され、ある部分が実際に言い表わされているのか、そして話し手の伝達意図の中心がどこにあるのかを聞き手が把握することになるのである。「母は、今花に水をやってい

ます。」は、どうであろうか。「花」は、「(庭に咲いている)チューリップ」を表しているであろう。または、庭に咲いている花が一種ではなく、何種類かの花を表しているのかもしれない。いずれにせよ、具体的に何の種類の花かを問題にしたいのではなく、もしそれを問題にしたいのであれば、最初から具体的にその名前を言うはずであるが、それをしないのには理由があるはずである。つまり、花に水をやっていること自体を強調する為に、あえて具体的な花の種類を省略し、そのことで花そのものを前面に出すのが、話し手の伝達意図の中心であったと言える。そして、そのような提喩の例は、それ自体では完全な命題を表しているが、話し手が意味することと一致させる為に、補足することでより豊かな命題にする必要のある例であるが、聞き手がより豊かな命題にした形で言われたことを理解することを意味するのであって、より豊かな命題を全て言葉で表現すべきであるとか、字義どおりの発話に言い換えることができるとかを意味しているのではない。より豊かな命題を直接言葉で表現しないことに意義があり、言い表わされる部分と言い表わされない部分の関係から、話し手の伝達意図の中心がどこにあるかを聞き手が把握することになるのである。今述べてきたように解釈できるとすれば、換喩と提喩にとって、表現の経済性は、単なる省略性に基づくのではなく、的確さと効率性に基づくものであるということが示されたと思われる。

「3. 隠喩・換喩・提喩の存在意義」では、全ての言語表現に共通して言える的確さと効率性に基づく表現の経済性が、隠喩、換喩、提喩にも当てはまることを示す為に、その前段階として、それぞれの存在意義を調べ、それらの質的相違による区別を明らかにすることに焦点を合わせてきた。従って、表現の経済性をさらに具体的に検討する必要があるが、本稿では、そこまで至らなかった。ともかく、質的相違による区別については、まず最初に、隠喩とそれ以外のものを区別し、次の区別が換喩と提喩の間で行なわれることを見てきた。そのことは、それら三つが互いに独立した、独自の存在意義を持つものとして区別することは重要であるが、単純に同列には論じられず、二段階による区別の必要性を示すものと言える。また、それらの間には、相違点だけでなく、共通点あるいは類似点もあり、そのことが解釈上の混乱を生み出し、さらに含意を加え、さらには言語表現全般の中で考えると、線引の問題は複雑化し、それが比喩研究の現状と言えるかもしれない。しかし、隠喩、換喩、提喩に限って言えば、全体の中でどのように位置付けるかは別にして、二段階による区別が必要であり、何らかの形で明確にされる必要がある。

4. 最後に

日常的な言語コミュニケーションにおいて、私達が伝達しようと意図することをいかに的確に、効率よく表現するかが、生活していく上での重要課題である。その為に、それぞれのコンテクス

トに適した（できれば、最も適した）表現形式を駆使していると言っていいであろう。その中で、隠喩、換喩、提喩などの比喩を含む表現は、重要な位置を占めているし、必要不可欠な表現形式としてある。そのことは、現在の言語研究そして比喩研究の状況を見ても明らかである。最後に付け加えておきたいことは、本稿では検討できなかったが、説得性と芸術的装飾性の問題が、演説、文学などの領域に限定されるものではなく、日常会話でも重要であると思われることである。日常会話における説得力と芸術的装飾の果たす役割は、しばしば軽視あるいは無視され、研究対象から除外されることがあるが、何かを相手に納得させる必要がある場面、挨拶、社交辞令などのように、人間関係を良好な状態で保たなければならない場面、その他の場面で、重要なものとして認識されており、現実の言語使用状況に即した研究が必要である以上、その役割を軽視あるいは無視すべきではないであろう。説得力にしても、単なる飾りにしても、単純に否定するのではなく、無意味で、余分なものとして、単なる付け足しと捉えるのではなく、人間関係を円滑に運ぶ上での一要素と捉えるべきなのではないだろうか。そして、その研究は、正に言語研究そして比喩研究の中でなされるべきであろう。

使用文献

- Bach, Kent, "Semantic Slack : What is said and more" in S. L. Tsohatzidis (ed.) , *Foundations of Speech Act Theory* (Routledge, 1994) .
- Bach, Kent and Harnish, Robert M. , *Linguistic Communication and Speech Acts* (The MIT Press, 1979) .
- Blakemore, Diane, *Understanding Utterances* (Blackwell, 1992) .
- Carston, Robyn, "Implicature, Explicature, and Truth – Theoretic Semantics" in R. M. Kempson (ed.) , *Mental Representation : The Interface between Language and Reality* (Cambridge University Press, 1988) .
- Dasal, Marcelo, "Conversational Relevance" in A. Margalit (ed.) , *Meaning and Use* (Reidel, 1979) .
- Gibbs, Raymond W. , "Process and Products in Making Sense of Tropes" in A. Ortony (ed.) , *Metaphor and Thought* (Cambridge University Press, 1993) .
- Glucksberg, Sam and Keysar, Boaz, "How Metaphors Work" in A. Ortony (ed.) , *Metaphor and Thought* (1993)
- Grice, H. P. , "Logic and Conversation" in P. Cole and J. L. Morgan (eds.) , *Syntax and Semantics, Volume 3* (Academic Press, 1975) .
- Lakoff, George, *Women, Fire, and Dangerous Things* (The University of Chicago Press, 1987) .

- Lakoff, George, "The Contemporary Theory of Metaphor" in A. Ortony (ed.), *Metaphor and Thought* (1993) .
- Lakoff, George and Johnson, Mark, *Metaphors We Live By* (The University of Chicago Press, 1980) . 『レトリックと人生』(大修館書店, 1986) も使用した。
- Lakoff, George and Turner, Mark, *More Than Cool Reason* (The University of Chicago Press, 1989) .
- Levin, Samuel R., "Language, Concepts, and Worlds : Three Domains of Metaphor" in A. Ortony (ed.), *Metaphor and Thought* (1993) .
- Martinich, A. P., "A Theory for Metaphor" , *Journal of Literary Semantics* 13. 本稿では, S. Davis (ed.) , *Pragmatics* (Oxford University Press, 1991) に収録された論文を使用した。
- Morgan, Jerry L., "Observations on the Pragmatics of Metaphor" in A. Ortony (ed.) , *Metaphor and Thought* (1993) .
- Recanati, F., "Pragmatics of What Is Said" in *Mind and Language* 4 (Blackwell, 1989) . 本稿では, S. Davis (ed.) , *Pragmatics* (1991) に収録された論文を使用した。
- Recanati, F., *Direct Reference* (Blackwell, 1993) .
- Sag, Ivan A., "Formal Semantics and Extralinguistic Context" in P. Cole (ed.) , *Radical Pragmatics* (Academic Press, 1981) .
- Searle, John R., "Indirect Speech Acts" in P. Cole and J. L. Morgan (eds.) , *Syntax and Semantics*, Volume 3 (1975) .
- Searle, John R., "Metaphor" in J. R. Searle, *Expression and Meaning* (Cambridge University Press, 1979) . 本稿では, A. Ortony (ed.) , *Metaphor and Thought* (1993) に収録された論文を使用した。『創造のレトリック』(勁草書房, 1986) に収録されているジョン・R・サール「隠喩」も使用した。
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, "Irony and the Use — Mention Distinction" in P. Cole (ed.) , *Radical Pragmatics* (1981) .
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, "Loose Talk" , *Proceedings of Aristotelian Society* 86(1985/6) . 本稿では, S. Davis (ed.) , *Pragmatics* (1991) に収録された論文を使用した。
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, *Relevance : Communication and Cognition* (Blackwell, 1986) . 『関連性理論—伝達と認知』(研究社出版, 1993) も使用した。
- Winner, Ellen and Gardner, Howard, "Metaphor and Irony : Two Levels of Understanding" in A. Ortony (ed.) , *Metaphor and Thought* (1993) .
- グループμ, 『一般修辞学』(大修館書店, 1981) 。1975年に出版された原書の翻訳本を使用した。
- ニコラ・リュウエ, 「提喩と換喩」(1975) 。『創造のレトリック』(1986) の翻訳された論文を使用した。

久米博, 『隠喩論』 (思想社, 1992)。

佐藤信夫, 『レトリック感覚』 (講談社, 1978)。本稿では, 講談社学術文庫版 (1992) を使用した。

佐藤信夫, 「転義あるいは比喩のかたち—または逆隠喩について」 (『理想』, 1982)。本稿では, 『レトリックの消息』 (1987) に収録された論文を使用した。

佐藤信夫, 『レトリックの消息』 (白水社, 1987)。

瀬戸賢一, 『レトリックの宇宙』 (海鳴社, 1986)。本稿では, 『認識のレトリック』 (1997) に収録された論文を使用した。

瀬戸賢一, 『認識のレトリック』 (海鳴社, 1997)。

樋口桂子, 『イソップのレトリック』 (勁草書房, 1995)。